
陰陽の魔女

香柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰陽の魔女

【Nコード】

N1402S

【作者名】

香柳

【あらすじ】

ノエルはハイランド王国の王女にして魔女。

しかし生来愚鈍なため、満足な魔術ひとつ使えない。

おりしもハイランドはヴァイキングの侵攻にさらされつつあったが、落ちこぼれ魔女のノエルには、魔術で祖国を守ることすらままならなかった。

そんな役立たずのノエルに、周囲の風当たりは強くなるばかり。

辛い状況の中、彼女は自分を導いてくれる相手との、運命的な出会いをはたすことになるが……。

中世スコットランド風異世界ファンタジー。

登場人物紹介

ノエル…ハイランド王国の王女にして、落ちこぼれの魔女。

翼任^{イレレン}…東からやってきた半神半人。ノエルのしもべ。

ディアドラ…ノエルのいとこ。優れた魔女であり、ノエルをしのぐ人気がある。

アングス…ハイランド王。ノエルの父。病身でふせっている。

ウィリアム…若きローランド王。政略結婚のため、ハイランドへやってくる。

ジェイミー…マッチョな妖精。ノエルの護衛をつとめる。

リース…赤毛でガタイのいい吟遊詩人。

ココ…イレレンをノエルのもとへ導いた神鳥。ブサカワ系。

プロローグ

この夜の幻夢泡^{げんむほう}には、遠いどこかの国の宮殿が映しだされていた。海ぞいの断崖にそそりたつ、石造りの城塞。そのてっぺんの露台で、岩に打ちつける波頭を見下ろしたり、そうかと思うとこんどは夜空を仰ぎみたりしている、赤毛の男。松明の光を反射して、彼の手にした黄金の護符が輝いている。

男は必死に何かを祈っていた。彼の護符は、上部が輪になった十字の形をしている。はるか西に住まうという、クレアトル教徒が持つ十字架だ。

やがて男は何かを聞きつけて、宮殿の内へと駆けこんでいった。しばらくしてふたたび胸壁へ戻った彼は、布包みのようなものを抱えている。その包みを高々と差し上げながら天へ叫び、彼は満面の笑みを浮かべていた。

「……あの人、何をしてるの？」

幻夢泡から目をそらさないまま、翼任^{イレシ}はかたわらの祖父に尋ねた。翼任たちがいるのは、島の中心にそびえる望楼の最上階。そこからは、海上に浮かぶ幻夢泡がよく見える。

おりしも幻夢泡に映しだされた光景の中で、赤毛の男の持つ布包みからちらりと小さな手足がのぞいた。

「あの包みはな、赤ん坊じゃ。男はさしずめ父親で、無事に生まれたのを神に感謝しとるんじやろうて」

祖父の答えに、翼任は望楼の欄干から身をのりだすようにして、幻夢泡を吐き出した蜃竜^{しんりゅう}に呼びかけた。

「蜃竜　！　赤ちゃんの姿も見せてよ　！」

海中の蜃竜にその声は届いたらしく、幻夢泡には男の抱える布包みが大きく映しだされた。

それは金色の巻き毛がうつすら生えた、文字通り真つ赤な顔で泣いている赤ん坊だった。小さな手のひらがしきりに動き、微笑む父

親の赤いあごひげにからみついている。

やがて男は赤ん坊ともども宮殿の内へと消えてしまったので、翼任はがっかりした。六歳になるこれまで隔離生活を送っていたせいで、赤ん坊を見たのは初めてだったのだ。

ほどなくして、幻夢泡はまさに泡のようににはかなく消えた。あとに残るのは、この島をとりかこむ暗い夜空と海、淡い光をはなつ月星の眺めだけ。

「……終わっちゃった。蜃竜は次はいつ、夢を見せてくれるのかなあ？」

翼任は祖父に手を引かれ、望楼をおりて奥殿へと向かった。そろそろ休まねばならない頃あいだ。夜ふかしをしすぎると、それだけ翼任の身に負担がかかるのだと祖父は言う。

翼任はその特殊な生まれのせいで、体が弱い。だから大事に大事に、風にもあてぬように育てられている。ただ今夜は珍しく蜃竜が幻夢泡を浮かべているというので、祖父は特別に見物を許してくれたのだ。

「さあて、次はいつになるやら。蜃竜はめったに、おのれの夢を披露したりはせんからのう。それがわざわざこの島のそばで、幻夢泡を浮かべてみせるとは。何を言わんとしておるのか。あの男と赤ん坊は、何を意味するのか……」

祖父は思案げにつぶやいた。

この蓬莱島をすべる尊い神仙である祖父 とうおうこう 東王公にすら、その意図が読めないなんて。それだけ蜃竜は不思議な存在なのだと、翼任は思った。

蜃竜とは海底深くにひそむ竜神で、いつも地上のさまざまなものを夢に見ている。ときに海上に浮かび上がっては、幻夢泡という巨大な泡を吐き出して、そこにおのれの見ている夢を映すのだ。神や仙人に対し天の意思を伝えようと、蜃竜はおのれの夢を見せるのだという。

「うわ！ お爺ちゃん あれを見てっ！……」

奥殿へとつづく回廊を渡るさなかに、翼任は庭を指さし叫んだ。広大な庭園には、神気をただよわす桃木が幾百本も生えている。その中心にとりわけ巨大な木があった。桃木の王、桃都樹とうとじゅである。その桃都樹の太い幹が、白い光を放っている。こんなことは、これまで一度もなかった。しかもその巨大な幹には、赤い鱗に銀の角の竜が一匹、巻きついている。

祖父が驚きの声をあげた。

「蜃竜ではないか！　なぜにあやつがここまで参ったのか……？」
どうやらあの赤鱗の竜が、先ほど夢を映しだしてみせた蜃竜だったらしい。

神仙らしく、ふわりと宙に浮かぶように軽々と、祖父は回廊から庭園へおりた。つづいて未熟な翼任が、ぱたぱた音をたてつつその後を追う。

「あれが蜃竜なの？　わ、何あれ？！」

桃都樹のもとへとやってきた二人は、さらに思いがけないものを見つけた。

太い幹の一部分が黄金に輝き、さらに光が明滅しはじめたのだ。心臓の鼓動のように木そのものがどくん、どくと脈打ち震え、やがて幹の中から、何かが生み出された。

蜃竜がそれを受けとめ、そっとくわえた。そのまま樹下へとおりて、翼任に差し出す。思わず受けとった翼任は面食らった。

「え、僕にくれるの？　これは……卵？」

それは翼任の幼い手のひらよりも少しだけ大きい程度の、青灰色の卵だった。

「桃都樹が生み出した卵か……まさか」

祖父が言いかけたそばから、翼任の手の中の卵が割れはじめた。息をつめて見守ると、ほどなくその中から顔を出したのは

「鵠鵠鳥こくこくではないか！　信じられん、今になってこれが生まれるとは」

孵ったのは、青灰色の羽毛に包まれたひな鳥だった。紅玉のよう

な赤い目でじつと翼任を見つめ、ひと声チイと鳴く。

とたん、翼任の幼い胸に、保護欲のようなものが芽生えた。この小鳥を守ってやらなければ。そうつと指先で、その羽先を整えてやる。

「鵠鵠鳥ーってこれの名前？」

尋ねると、祖父は無言で翼任と小鳥とを交互に眺めた。

しばらくして、かたわらに大人しく控える蜃竜に「おぬしの意図はよく分かった。もう海へお帰り」と命じる。蜃竜は満足げに一声鳴いて舞い上がり、その勢いのまま海中へと飛びこんだ。

祖父はため息をついた。

「なんということだ……よりによって、おまえが鵠鵠鳥に選ばれるとは。わが血筋の者の宿命とはいえ、あまりにむごい」

翼任は眉をしかめた。この小鳥が自分の手のひらで孵ったことが、何か悪いことにつながるのだろうか？

祖父がひざまずき、翼任の小さな肩に両手をおいた。

「よいか、翼任。おまえは生まれたばかりの西王母さまの、守役に選ばれたのじゃ。さきほどの幻夢泡の、金髪の赤ん坊を覚えておるだろう？ あれが今宵、三千年ぶりにお生まれになった西王母^{せいおうぼ}さまなのじゃ。そしてその鵠鵠鳥は天の使者。東王公の血筋の者に西王母さまの誕生を告げに来たもの。……おまえはいずれ、天命にしたがい、西王母さまを守りに行かねばならぬ。それがわれらの血筋の者のさだめなのじゃ。蜃竜はそれを告げようと、今夜われらにそのような夢を見せたのだろう」

「えっ、西王母さまって、もしかしてあの、伝説の神女さまのこと？！」

「そう。天地の気が乱れきったときに、天命をうけてこの世に生をうける神女。天地に調和をもたらすお方じゃ。その使者である鵠鵠鳥が、東王公の血筋のものを守役に選び、西王母さまのもとへ導くことになっておる。……だがよりもよって、か弱いおまえが選ばれてしまうとは。わしが替わってやれぬものか」

翼任はむつとした。六歳とはいえ、大人に負けぬほどの矜持はある。

「お爺ちゃん、僕は西王母さまを見つけ出して、守ればいいんだよね？ 今からがんばって体を鍛えて、きつと強くなるよ！ それに死ぬまでここでじつとしてるより、ずっといいもん」

祖父はふ、と憂い顔になった。

「西王母さまを見つけ出すところから、おまえは始めねばならんじゃないよ。さっきの幻夢泡を見たらう？ 西王母さまのお生まれになった場所は、西のさいはての国のようじゃ。ここからその国までは遠い上、異国の土地神や精霊や妖怪がごまんとおる。それらはおまえを、すんなり通過させてはくれんだらう」

「でもこのへんの天華国の人間たちだって、船で西の果てまで行ってるんだよ。人間にできて、神仙にできないわけないよ！」

「おまえには分からぬ困難があるのじゃ。そう簡単にはいかぬ。それに西王母さまにお会いしてから後も。おまえはかのお方をお守りするために、さらなる苦勞を味わうだらう……むしろ本物の苦勞は、西王母さまに会ってからのこと」

憂い顔の晴れない祖父に、翼任が困惑していると。

手の中の鵠鵠鳥が、翼任を励ますようにチイチイと、威勢よく鳴き声をあげはじめた。

「大丈夫だよ、お爺ちゃん。この鵠鵠鳥が、西王母さまのもとへ案内してくれるんだから 何もかもうまくいくよ、きつと！」

生まれたての鵠鵠鳥の羽毛は、しつとりと濡れている。それを袖でぬぐってやりながら翼任が告げると、祖父は諦めたように首をふった。

突然、森の中に女の金切り声が響きわたった。

「んまあノエルさまっ！ それは皇帝ダケという毒キノコですよ！
いくらお飾りに使うだけでも危険すぎますっ」

「そ、そうなの？！ 綺麗だったからつい……」

侍女頭に叱られ、ノエルは真っ赤なかさに白い水玉もようのついたキノコを、あわてて近くの茂みに捨てた。

「魔女は薬の専門家のはずなのに、キノコの知識が侍女以下だなんて……。ましてやあなたは、ここの世継ぎの王女でしょう？ いいかげん、しっかりしてちょうだい！」

ノエルと侍女頭のやりとりを聞きつけたディアドラが、いつものごとく厳しい言葉を投げつけてくる。

「その皇帝ダケはね、昔この地がレムロム帝国に攻め入られた時、当時の魔女が敵の皇帝を毒殺するのに用いたキノコなのよ。だからその名になったの。有名な話だし、わが一族の毒物辞典には、でかでかと載ってるはずだけど？」

ディアドラにきつく責められ、ノエルは真っ赤になった。

二人はいとこ同士で年齢ともに十七歳、どちらもいにしえからの偉大な魔女の血をひく一族だ。ところがその能力と知力にはだいぶ差があつて、すぐに知識を吸収して難しい魔法を使いこなせるディアドラにひきかえ、ノエルは愚鈍で、ささやかなおまじないすら施せない落ちこぼれ魔女だった。

その容姿も対照的で、ノエルは濃い金色の髪にはしばみ色の瞳をしており、その子リスのように大きくつぶらな瞳のせいもあつて、温かく愛らしい印象を人に与える。対してディアドラは冴えた月光のような銀髪に紫水晶の瞳で、「氷の女王」と評されるほどの、冷たくととのった美貌の持ち主だった。

ディアドラは、その白く秀麗な面だちを憂わしげにゆがめつつ言

った。

「まあでも、あなたはたしか『猫でも分かる魔法入門』を学んでるところなのね、ノエル。毒物辞典なんてまだまだ難しい段階だわ。

……考えてみると、入門書なんて私は十歳の頃に学び終えたのに、あなたが十七歳になってもまだその段階なのっておかしいわ。教師が悪いんじゃない？ 魔術修道院長を、クビにしたほうがいいのかもしれないわね」

「い、いいえディ！ 院長さまは悪くないわ！ 私の覚えが悪いだけなの。入門書を勉強しはじめて七年たつけど、やっと三分の二を覚えたところだし。だいたい私、ひとつの魔法をマスターするのに半年はかかってしまうの。院長さまは、無理に勉強しても忘れるだけだから、私のペースでゆっくり学びなさいと言ってくれたわ」

ノエルは素直に答えた。ディアドラの軽蔑のまなざしが痛かったが、本当のことなので仕方がない。

「……あのね、ノエル。今のこの状況では、ゆっくりお勉強している時間なんてないのよ、分かってる？ ヴァイキングがこのハイランドを狙ってて、本島に攻めこんできている。対するこちらは、王であるあなたのお父上がご病気だし、隣国との同盟もなかなか成立しない。しかも王都であるこの小島は、いつも悪霊に襲われてばかり。こんなときこそ、魔女である私たちがなんとかしなきゃいけないのよ？ きついことは言いたくない。でも私が必死で民と国を守ろうと考えているのに、あなたときたら、ゆっくり学べばいいと考えてるなんて……！ 私のつらさを、あなたは分かってないんだわ！」

「ディ、そうじゃないの！ そうじゃなくて私は……っ」

もちろんノエルだとて、おのれの無能さを申し訳なく思っているし、いつも一所懸命に努力しているのだ。ただ結果がともなわないだけで。

だが口下手なせいで、ディアドラに誤解されてしまったらしい。いつも冷静でしとやかなディアドラが、白い頬を紅潮させてわな

わなと両手を震わせている。そのさまを見て、侍女頭がなだめにかかった。

「ディアドラさまが私たちのために尽力くださっていることは、皆がよく分かっておりますわ！ もはやこの『魔女の島』は、あなたさまなしには立ちゆきませんもの。悪霊をなんとか撃退できるのも、王の特別なお薬を調合できるのも、ディアドラさまだけ。魔術修道院長ですら、そのお力には及びませんし。さあ、どうかお心をおしずめになって。きっとお疲れなのですわ、不眠不休で働いてらっしゃるんですもの。残りの材料は私たちで集めますから、ディアドラさまは先に城へお戻りくださいまし」

するといつのまに集まっていたのか、他の侍女らもディアドラをとり囲み、感謝と慰めの言葉を口にした。それとは対照的に、魔女としての義務をこれっぽっちも果たせないノエルに対して、侍女らは態度で反感を示している。

自分へのとげとげしい空気を感じとって、ノエルはいたたまれずに言った。

「……あの、残りは私が集めて持って帰るわ。だから皆は、ディをつれて城へ戻ってちょうだい」

すると侍女らは全員ディアドラにつき従い、ノエルを残して森を去っていった。驚いたことに、共に残ろうとする者は誰もいなかった。ノエルは王のひとり娘だというのに。

このハイランド王国では、第一王女に王位継承権があり、その王女の夫となった者が王として即位し、国を治めることとなっている。しかし王弟の娘であるディアドラがここへ来てからというもの、城下の民たちは、ノエルを廃嫡してディアドラに王位継承権を与えるべきだと噂しているようだった。

どうやらその思いは、城内の使用人らも変わらないらしい。（でもしょうがないわ、私はとろくさいから。国と民のためを考えたら、ディが治める方がいいもの。でもー）

でも、自分が皆の役に立てないことが悲しくてならなかった。せ

めてディアドラの十分の一でも、魔法が使えたなら。薬草の知識を身につけられたなら。父王や民らを安心させられるのに。

（……落ちこんでる場合じゃないわ。今夜にも悪霊の襲撃があるかもしれないんだもの。早く枝を集めて帰らなきゃ！）

めそめそと泣き出してしまいたい弱気を、なんとかノエルはおさえこんだ。

そもそも彼女らは、魔除け飾りをこしらえるための材料をとり、この森へ来ていたのである。

というのも、このところ「死の船団」に乗った悪霊アंकウの大軍が海からあらわれ、たびたびこの島を襲うようになっていたからだ。

アंकウは海で死んだ人間の迷魂だと言われており、手当たりしだいに生者をさらっていく。彼らの「死の船団」に乗せられた者は、その仲間にならざるをえないのだという。

だが彼らがこれまで、陸地の者を襲ったという例はない。おそらくはハイランドを侵略しつつあるヴァイキングが、魔法でアंकウを操っているのではないかと、ノエルの父王は考えているようだった。

とにかくその悪霊の襲撃に備えるには、城下を魔法結界で守るしかない。そして魔法結界をこしらえるには、魔除け飾りを城下の要所にかかげる必要があったのだ。

魔除け飾りには、ヤドリギとナナカマド、それに色とりどりの花や実、キノコが要る。春とはいえ、まだまだ空気が冷たく手もかじかむ中、それらを集めるのは容易な仕事ではない。さらには数日で魔除けの効果が薄れることから、そのつど材料を集め、こしらえる手間がかかるのである。

これまでに皆の集めた材料は、森の入り口につながれた、ロバの引く台車に積まれている。ノエルがその量を確認すると、ヤドリギが圧倒的に足りなかった。

だがそれも仕方のないことだ。高い枝に寄生するヤドリギをとる

のは、重いドレスを身につけた女には難しいことだった。それにこはそもそも、妖精の森でもある。この森のヤドリギには妖精が化けたものもあり、その場合は呪文を唱えつつ切りとらないと祟られてしまうという。おっかなびっくり作業していて、効率が良いわけはなかった。

（しょうがないわ、久しぶりに木登りするしかないわね。どうせ誰も見てないし、やっちゃおう）

ドレスの長い裾をベルトにたばさむと、ドロワーズが丸見えになった。とても人前にはさらせない姿である。だがここは王家所有の森であり、みだりに誰かが来る可能性は低い。

ノエルは手近なヤドリギのついた木に、思いきって登りはじめた。時刻はもうすぐ昼。夕暮れまでに魔除け飾りをこしらえ、城内の広い範囲にそれをかけなければならぬのだ。急ぐに越したことはない。

幸い木登りは苦手ではなく、パイを食べ終わるほどの時間のあいだに、ヤドリギをだいぶ集めることができた。

（もうこれでいいかな……？）

そう思いはじめる頃にかぎって、良いものが見つかったりする。ノエルは少し奥まった場所のオークにかかるヤドリギが、とりわけ大きくかつ葉もみずみずしいのに気がついた。あれを城門にかける飾りに使えば、立派な魔除けになることだろう。アंकウへのよい防御となるに違いない。

そのオークに登り、妖精鎮めの呪文を唱えつつ、ヤドリギへと手をのびかけた時。思いがけないことが起こった。

「んあ?! なんだよおまえ? その刀で、俺の体に切りつけようってのかあ?!」

とどろいたのは、野太い男の声である。ノエルは驚き、手にした小刀をとり落としてしまった。どうやらこのヤドリギは、妖精の化身だったらしい。ノエルの呪文も効果なしだったのだ。

「なんだ。あんた、魔女じゃないか?! …… もう本物の魔女なん

て、ハイランドにはいないと思ってたのに。あんたはどこの、誰の子だ？ どうして俺らのところへ、挨拶に来なかった？！ 今さら俺に何の用だよ！ 俺はジェイミーって言っただけど、あんたは？」

ノエルが謝る暇もないほど、ヤドリギが矢継ぎ早に尋ねてくる。と、いきなりつる草のようにその枝が伸びてきて、ノエルの手首に巻きつく。驚いたノエルが叫び声をあげようとしたとたん。

「ぎゃあ ああああああああああつ！！」

絶叫が森の中にこだました。ヤドリギが発した野太い声だ。

「お、おまえ……誰だよ！　なんなんだよ！　何者なんだよおお！　怖えよおおおおおおおつ！！」

ヤドリギの枝がノエルの手首から、火傷したかのようにぱつと離れる。

あまりのことにノエルが木の上で硬直していると、ヤドリギは自らオークを離れて変身し、どたりと地面に降り立った。ノエルの知るどの戦士よりも上背がある、緑色の髪の大男に、ヤドリギ妖精は変じたのだ。筋骨隆々の巨人は、人々がふつうに想像する妖精の姿とはかけ離れている。ノエルも本物の妖精を見たのは初めてだったので、混乱と驚きにどうしてよいか分からなくなった。

「お、お、俺はおまえには悪さしてねえだろおがつ？！ 頼むから見逃してくれよおつ！！」

ヤドリギ妖精はいかつい顔に恐怖を浮かべ、こちらを見上げて叫んだ。そして答える間もなく風のように疾走して、森の奥へと逃げていく。

（あ……あれが、ヤドリギ妖精なの……？　なんか、魔法入門書の記述とかけ離れてるような姿してる……？　び、びっくりした。それにしても、何にあんなにおびえてたんだろう？　そういえば、ジエイミーって名のってたわ。私の馬と同じ名前なのね……知ったら気を悪くするかも、だけど）

樹上であつけにとられながら、ノエルは妖精の去つた方角をしば

し、見つめていたのだった。

ハイランドは、ゲール島の北半分を占める王国である。

その王都エイデンヴァランドは、ゲール島の西北端によりそうように浮かぶ「魔女の島」に置かれていた。ゲール島からは、ほんの目と鼻の先にある小島である。

そして王の住まう城は、「魔女の島」の海ぞいの崖に、いかにも堅牢なようすでそり建っていた。灰色の石組みでできた無骨な外観の城塞で、華麗さや洗練にはほど遠い。だが素朴でたくましいハイランド人の生きざまを、象徴するような城だった。

ハイランドは貧しい。気候が寒冷で土地は痩せている。だがその民は、氏族ごとに集落をこしらえ放牧と農業に精を出し、つつましかな幸せを築きあげていた。

ところがそのささやかな平和は、ここ一年のヴァイキングの襲撃で崩壊した。

ヴァイキングはもとと、北東の海域から進出してきた海の民だが、十年前に、ゲール島の南に位置するヨーラ大陸を制覇した。その勢いに乗って、一年前にゲール島へも侵略を始めたのだ。

そもそもゲール島は、二つの国に分かれている。北のハイランド、南のローランドだ。この二国が団結すれば、ヴァイキングを撃退することも可能だったろう。だが長らく島の覇権をめぐって争ってきた二国は、なかなか同盟を結べずにいたのである。

足なみそろわぬゲール島側は劣勢に立たされており、島の要所がヴァイキングの手中におさめられつつあった。

不幸はつづくもので、ちょうどヴァイキングの侵略が始まった頃からハイランド王アングスは原因不明の病に苦しみはじめ、軍兵を率いて戦うことすらできなくなった。かわりに戦場での指揮をとりつづけているのは、王弟ベリックである。

アングス王は「魔女の島」の王都で病床にふせり、その王を守り

支える役目は、王女ノエルと王弟ベリツクの娘ディアドラが担うこととなったが。

さらに追い討ちをかけるように、この数ヶ月、王都は悪霊アंकウの襲撃の恐怖にさらされはじめたのだ。

今やノエルとディアドラの双肩には、この国の命運がかかっていた。

「ノエルさま、城外の要所すべてに魔除け飾りをかがけ終えました！ そろそろ戻らないと、城門が閉じられます！」

魔術修道女らの報告を受けて、ノエルはすぐさま城内への避難を命じた。閉門の鐘の音が、せかすように城下に鳴り響いている。

悪霊アंकウによる夜襲を恐れたアングス王は、夜間は民らをおのれの城内で保護することと定めていた。

城では騎士や兵らが、夜を徹しての守備につく。早々に城門も閉じねばならず、遅れれば皆に迷惑をかけてしまうだろう。

「さ、ノエルさま！ 早く馬へお乗り下さい！」

警護の騎士が、焦りながらノエルに手綱を渡す。ノエルの愛馬ジエイミーも、恐怖を予感して興奮気味だった。

ノエルは愛馬にまたがり、騎士と共に城内への帰途を急いだ。

西の海に、今にも日が沈もうとしている。とにかく夜が恐ろしい。城内ではすでにディアドラと魔術修道院長が、魔法結界の術にとりかかっている。ノエルは魔術修道女らと手分けして、結界の助けとなる魔除け飾りを、城外の防壁のあちこちにとりつけていたのだ。

「待つて！ 閉めないでー！」

轟音をあげて、城の跳ね橋が上がるようになっている。ノエルたちは馬を疾走させて、なんとか閉門に間に合った。

ディアドラたちの魔法結界は、ほぼ完成しつつあるようだ。目には見えないが、結界が蜘蛛の糸のごとく周囲にはりめぐらされているのが、落ちこぼれとはいえ魔女のノエルには感じとれる。

城内の庭には、所せましと多くの避難民らがひしめきあっていた。

仮設テントが張られ、炊き出しが行われ、民衆らは不安げな表情を浮かべている。元気に夕飯のオートミール粥と薫製ニシンをほおばっているのは、無邪気な子供たちくらいのものだ。

広場のすみでは王のはからいにより、本島から呼びよせた道化師の団が芸を披露し、民らの不安をそらそうとしていた。玉乗りや刀剣投げなど、そこだけを見ればまるで祭り日の催しのように華やかな風景だ。

ノエルが通りすぎたすぐそばでは、吟遊詩人がリユートを奏で、女たちの熱い視線を浴びていた。筋骨隆々とした大男で、顔にはなめ走る刀傷まである。どうやら戦場で負傷した兵士が、職業を鞍替えしたという態だったが。男くさい、苦みばしった吟遊詩人らしからぬ容姿がかえって、女たちの関心を引いているようだった。

「ねえ詩人さん、景気のいい歌にしてよ！ こう、ぱあっと明るくて、怖いこと全部忘れちまうようなのを、さ！」

「そうそう、あんたの良い声で悪霊を追いはらっておくれよ！」

そうリクエストする女たちの声が聞こえてくる。

近づく恐怖を忘れようと、みな必死なのだ。よくよく見ると広場にいるどの民も、その顔に心からの笑みが浮かんでいない。何かにすがりつくような目をしている。

ノエルは皆を守るために何でもしようと、改めて決意を固めた。

「ノエルさま、王が呼びです」

興奮する愛馬ジェイミーをなだめつつ、厩舎へたどりついたところへ、小姓がそう告げに来た。ノエルはすぐさま城の上階にある、父王の寝室へと向かった。

「お父さま……お加減はどう？」

病床に横たわるアングスからは、つんとくる薬湯の匂いがただよっていた。その顔色も赤みをおびて、いつもより容態が良いように見える。

ノエルがそつと枕元の椅子に腰かけると、父がその手を握ってきた。かつてのアングスは燃えたつような赤毛の、日に焼けた肌をしたたくましい大男で、ハイランダーのほまれと讃えられたものだったが。今はげっそりとやつれて顔色も青白く、見る影もない。

「ああ。ディアドラの薬湯がだいぶ効いてきたようだ。さっきよりは楽になった。……城下の魔法結界はどうだ？ ディアドラはずっと魔術修道院にこもりきりで、中のように分かんのだ。うまくいっているといいが」

「もちろん大丈夫よ！ きつとお母さまが生きておられたら、こんなふうに完璧な結界を張られたんじゃないかと思うくらい。ディは本当にすごい。とても私と同じ年のいとは思えないわ」

誉めちぎりながらもノエルは内心、おのれが恥ずかしくてたまらなかった。偉大な魔女だった母の血を、これっぽっちも受け継がなかった落ちこぼれであることが、情けなかったからだ。

「……ノエル、おまえはとてよくできた子で、私の誇りだ。他人と比べて己を卑下するのは空しいことだぞ。神はわれら一人ひとりに、異なる宝を与えたもうたのだから。むろんディアドラも素晴らしいが、おまえにも秘められた力がある。まだ皆には見えてないだけで」

ノエルは思わず、父の優しい手を頬にあてていた。世界中に否定されても、ただひとり肉親が自分を信じてくれるなら、それだけで救われる。

実のところ、父がこうも優しくなれるとは、以前のノエルは思いもしなかった。

健康だった頃のアングス王は、ただ一人の跡継ぎであるノエルに對して厳しかった。愚鈍な彼女を、なんとかして人並みにしようと考えていたようだった。だが生まれてはじめて重い病気をわずらったことで、ものごとを違う見方でみることができるようになったと父は言う。ノエルはノエルらしくがんばればいいのだと、励ましてくれるようになったのだった。

だが父娘のつかのまのやすらぎの時間は、物見櫓からの激しい鐘の音でうち破られてしまった。

「悪霊だっ！ 海上からアंकウの『死の船団』が来るぞおっ！！」
あたりに知らせる、緊張した兵士の声。ノエルはとたん、緊張に青ざめた。力づけるように、父が手を握りしめてくる。

ノエルは父の寝室を出るや、上階へのらせん階段をかけのぼった。胸壁へ出て、海上の方角を見やる。ぼうと青くまがまがましい炎に包まれた、古びてはいるが大型の帆船が数十艘、こちらへぐんぐんと近づいている。

それはまぎれもなく、悪霊アंकウひきいる「死の船団」だった。

悪霊の襲撃を知らせる鐘が、うるさいほど鳴り響いていた。

城内に恐怖が満ちる。今夜を生きのびられるだろうか？

民のほとんどは、あまりの恐怖に声も出ず、おのおの十字架を手にひたすら神に祈っていた。

厩舎や家畜小屋からは、おびえた動物たちの叫び、それに暴れる物音が聞こえてくる。獣たちは、人間以上に悪霊の不気味な気配を感じとっているのだろう。

城兵とそれをまとめる騎士たちが、おのおの配置について武器をかまえる。魔術修道女らも結界を保持しようと、魔除け飾りのもとで神への祈りと守護呪文とを、交互に唱えはじめた。

ノエルは急いで主塔の大広間へと向かった。

そこにはこの戦闘の指揮をとる、王の腹心たる家臣らがつめている。彼らはノエルを見るや、一応の礼儀で席を立ち貴婦人への礼をとったが、そこから先は無視だった。緊急時で、役立たずのノエルにかまう余裕などないのだ。

そんな家臣らにときばきと指示を出しているのは、主卓の高座に女王のごとくかけているディアドラだ。その姿を見てノエルは驚き、思わず尋ねかけた。

「デイ！ 魔法結界のほうはー」

「そちらはもう完成したわ。あとは魔術修道院長さまに、維持してもらえばいいだけ。城兵を統率する王族が、ここには必要なもの…

…しょうがないわ、他に適任者がいないから」

皮肉っぽく言うと、ディアドラはすぐに家臣らの報告のつづきを聞いた。

「ディアドラさま。物見櫓からの報告では、ネヴァンまでもがこの襲撃に加わっているようです。こちらの守備は空中からの攻撃には脆弱ですから、いくつかの分隊を今すぐ、ネヴァン対策にまわす許

しをいただきたい」

「ネヴァンとは？」

「大鴉の姿をもつ魔物です、ディアドラさま。かつてヨーラ大陸の戦場で、目にしたことがございます。翼を広げると馬車一台ほどの大きさがあり、人肉を好むのです。……あれが空から襲ってきたら、このままでは城内全滅でしょう」

はたで聞いていたノエルは、ぶるりと震えた。

まさかアंकウともども、そんな恐ろしい魔物までもが襲ってくるとは。

やはりこれは父王の読み通り、ヴァイキングによる企みに違いなし。そうでなければ悪霊と魔物が大挙して、わざわざここを襲ったりするはずがないからだ。

「分かったわ。私は戦に不慣れだから、すべては貴方たちの考えに従います。必要な兵を率いて、そのネヴァンの襲撃に備えてちょうだい。……ノエル」

急に名指しで呼ばれ、ノエルの心臓がはねた。

「あなたには正門の守備に協力してもらっわ。あそこはこの城の要だもの。たとえあなた程度の魔女でも、いないよりは心強いから」
「いちいちとげとげしい物言いをされても、ノエルはすでに慣れきっていた。それに自分が役立たずなのは事実なので仕方がない。ここは命がけで、城門を守ろう。死に物狂いでやれば、少しは皆の助けになるかもしれない。」

ノエルは祖先から伝わる「魔女の剣」を手に、正門へと向かった。破魔の力をもつこの剣ならば、アंकウを倒すのも容易だ。少し前からノエルは騎士らに頼みこんで、剣技を教えてもらっていた。愚鈍な彼女はここでも覚えと要領の悪さを発揮したが、なんとか基本的な技のひとつふたつを、身につけることができていた。

運がよければアंकウを一体ぐらいは、地獄への道連れにできるだろう。

城の正面は、水堀と落とし格子、そして鉄扉で三重に守られている。ふつうの戦闘なら十分に持ちこたえる堅牢な城門だが、今回の敵はふつうではない。悪霊と魔物なのだ。魔法結界や魔除け飾りが必要れば、すぐにも破られてしまっただろう。

しかし、その頼みの魔術にも限界はある。

（いけない！ 結界にほころびができたわー！破れ目を敵が広げる！）

そうノエルは感じとり、腰の剣を抜いた。

この半年の間に、アंकウは二度襲ってきた。ディアドラの結界のおかげで、なんとか城門を破られずに済んでいたのだが。今度の襲撃では、なみならぬ魔力のエネルギーを、ノエルは感じていた。過去の襲撃は小手調べ。今度こそ本気で、アंकウはこの城を落とすつもりなのだ。

どん、どんと鉄扉をきしませる、化け物どもの想像を絶する力。

彼らの侵入を許せば、こちらは全滅するだろう。

「このままでは扉を破壊されてしまう！ 何か支えになるものを持つてくるんだっ！」

騎士が叫び、それに応えて兵士らが丸太で扉を支える。が、それも気休めにすぎない。

悪霊のおぞましい雄叫びや、まがまがしい魔物の鳴き声が、鉄扉の向こうから聞こえてくる。

皆はすでに覚悟していた。どうあがいても、もうすぐこの城門が破られてしまうだろうことを。

ノエルは抜き身の剣をかまえた。こうまでくると、もはや恐怖はない。

どん、どおん、どおおん！

耐えきれずに鉄扉が外れ、轟音をあげてこちら側へと倒れてくる。

もうもうと土煙があがり、松明の炎をさえぎる。

城外の闇の中から現れ出たのは、海の死神　悪霊アंकウの群れ。ぼろぼろの古い衣装をまとう白骨化した人間が、青い炎を全身から発している。その手には、まがましい大鎌。幾度見ても見慣れることのない、不気味な姿だった。

津波のごとく、その大群が城内へとなだれこんでくる。

弓兵、弩兵らが無数の矢を射かけても無意味なほどの数だ。後から後からわいてくる。

破魔の効果のあるヤドリギとナナカマドの枝を身につけていた城兵たちが、入口でとどめようとアंकウに斬りかかる。だが、重い剣で斬っても突いても粉碎しても、アंकウは次から次へとわいて出てくるのだった。

「くそつ、とんでもない数で攻めてきおったつ！　このままではこちらが全滅するぞっ！」

ノエルのはそば近くで戦っていた壮年の騎士が、悪態をついた。そうする間にも悪霊は怒濤の勢いで押し寄せてきて、城兵らをなぎたおしていく。

ノエルは「魔女の剣」をふりまわし、アंकウの攻撃を避けるので精一杯だった。ノエルだけでなく、その場の騎士も城兵らも同様だったろう。

「ああっ！　ノエルさま！」

転倒したノエルに、身近にいた騎士の一人が声をかけてくる。だが彼にも余裕がなく、こちらを救うことなどできはしない。ノエルはなんとか立ち上がろうとしたが、その瞬間、青白い炎をまとう骸骨が大きな鎌をこちらに振り下ろそうとしているのに気づいた。

死が間近にせまる。

凍りついた眼差しに、まがまがしく青白い大鎌がせまってくる。

ノエルは悲鳴をあげることも、身動きすらも出来なかった。

何かがぶつかり、金属同士のこすれあう音。そして叱咤するかのような声。何が起きているのか分からないうちに、ノエルはふわり

と身体ごと、すくい上げられた気がした。

気がつくとは誰かの小脇に抱えられ、守られていた。救い主はもう片方の手に細身の剣を握り、いとも簡単に悪霊たちをなぎはらっている。歴戦の勇将ですら、アंकウの骨を断ち切れず苦戦しているというのに。

救い主はすらりと背が高く、体つきもひきしまっている。若い男のようだ。アंकウの身が発する青い光が、彼の姿をほのかに照らし返している。ただ彼は暗色のマントを頭からすっぽりかぶっており、ノエルからはその顔を見ることがすらかなわない。

ふと、ノエルは不思議な花の香りをかいだ。この救い主の青年の衣から、そのかぐわしい香りは漂ってくる。ヒースでもラベンダーでもない、大陸渡りの香水とも違う、不思議な甘い香り……。

だがその香りにひたる暇はなかった。アंकウが恐るべき数と勢いで、城門から押し寄せてくる。城兵は自らを守るのに必死で、とどめるすべはない。悪霊が津波のように呑みこもうとしていた。

このままでは全滅してしまう。

ノエルは衝動的に彼の腕を握り、助けを求めている。

「お、お願い、助けてください！ アंकウの侵入を止めてくださいつ！」

口にして初めてそれが、無意味な願いだと悟った。なにしろ敵は無数におり、これを独力で防ぐのはとうてい無理だからだ。

「……あなたはまだ目覚めておられないらしい。目覚めればこんなもの、すぐにでもどうにかなるだろうに」

せまりくるアंकウを数体、ひといきに倒しつつ、彼が初めて言葉を発した。やはり若い男の声だ。だがその発音にはやや異国なまりがある。

次に彼は、せまりくるアंकウらの首をなぎ払った。ころころと転がり落ちた髑髏にひとつを、器用に剣先ですくう。青い炎をまとう、まがまがしい髑髏だ。それを彼が剣先で独楽のように回すと、青い炎が油をかけたかのごとく燃えあがり、真紅色に変化した。

これらの動作は、ほんの一瞬のこと。

そして彼は、真紅の炎を吹き出す髑髏を剣先にのせたまま、さつと襲いくるアंकウらの鼻先をかすめていった。

髑髏の炎が噴出し、雷光のようにあたりを駆けめぐる。真紅の炎が襲いかかるや、おぞましい絶叫とともに、アंकウたちが燃えていく。

（魔法……これは魔法なの?!）

ノエルは驚愕で声を失った。アंकウたちが燃え、そして灰になっていくかたわらで、真紅の髑髏はますます激しく炎をあげた。そして謎の青年はそれを、城門のほうへと投げつけた。真紅の炎が火柱となり、アंकウらの侵入をはばむ。

「ノエルさま！ これは一体……？ あの炎は?!」

救援に駆けつけたらしい城兵たちが、あつけにとられてノエルを見やる。あたりには死傷した城兵らが倒れ伏している。壊れた城門、そしてそこで燃え上がる真紅の髑髏。城外の悪霊どもは、その炎に恐れをなしたか、城門へ近づいてこようとはしない。

「い、今のうちに城門をつ！」

気づいたノエルが叫び、あわてて壊れた城門へと駆けていく。つづいて救援兵らも城門へとびつく。屈強の者が数十人、力をふりしぼって倒れた鉄扉を元通り閉め、横棒を通した。

皆がほつと安堵したところで、騎士のひとりが尋ねてくる。恐れと好奇心がないまぜになったような表情だった。

「ノエルさま……これは全て、あなたの魔力でなされたことですか？」

言われてはじめて、ノエルは気づいた。いつのまにかあの謎の救い主が、消えていることに。

「ち、違っわ。私じゃありません。知らない方が 魔法使いなのか兵士なのかすら分らないけど、とにかくかなりの魔術と剣術を身につけた人が、私を救い、アंकウを追いつけてくれたのよ。あなたがたは、あの方を見なかったの？」

「われらが駆けつけた時には、ここに生きて立っていたのは、あなたただけでした」

「……そのことは後にしましょう。それよりも、こここの怪我人たちを助けなければ！ 救護班を呼んでちょうだい。それから、他の場所は大丈夫なの？ 戦況は？」

焦って尋ねたノエルに、騎士は「ご安心を」とうけあつた。

「ディアドラさまがあの大偉大な力で、大鴉どもを滅ぼしてくださったのです！ まもなく城外のアンクウドも、一網打尽となるでしょう。……本当にあのお方の魔力は素晴らしい」

騎士はまるで、神を崇拝するかのような表情で、主塔の方角を見やった。ディアドラのいる指揮本部であるその場所からは、強力な魔力の気配が、ノエルにも分かるほど伝わってきていた。

「それにしても、ディアドラさまの魔力の強さときたら半端じやねえ。まるで言い伝えの、偉大なる魔女のようだったな。俺はこの目で見たぜ、あのどでかい鴉どもがディアドラさまの雷魔法で、ばたばた落ちていくのをさ！」

「それにディアドラさまの狂いの魔法のおかげで、アンクウどもが同士討ちを始めやがって全滅したんだ。まさに偉大な魔女の再来だ…… ああ、惜しいなあ。世継ぎの王女がディアドラさまだったなら良かったのに。あの方なら、ヴァイキング軍なんぞひとひねりだろうしな」

通路の端で城兵らが熱っぽく語っているのを、父の寝室へ向かう途中のノエルは、偶然に立ち聞いてしまった。とたんにそのルートを通るのをやめて、迂回する。このような気まずい場面に、これまで何度出くわしたことだろう。

三日前の晩、海から「死の船団」がこの王都へ攻め寄せてきた。これまでにないおびただしい数の悪霊アンクウ、それに大鴉ネヴァンまでもが加わった敵の来襲に、王都もこれまでかと思われたが。王弟の娘ディアドラの強大な魔力がその窮地を救ったのである。

ディアドラへの賞賛の声は、やむことがない。今なお城の内外を問わず、人々は彼女の魔法の話でもちきりだった。

一方、ノエルへの皆の評価はというと、ディアドラへのそれとは対照的である。

正門の守備を任されたものの、城門を破られたあげく多数の城兵が死傷し、おのれのみ無傷で生きながらえた王女。懦弱な卑怯者。ディアドラのさしむけた救援兵のおかげで正門を守りきれたのだと、ひそかに揶揄されていた。

ノエルを土壇場で救ったあの謎の青年のことは、全く噂にはならなかった。謎の戦士だか魔法使いだかが現れてノエルと城門を救っ

たなど、あまりに荒唐無稽な話だったからだ。誰もノエルの言葉などは信じず、結局のところ、城門を守ったのはディアドラのよこした救援兵たちだということに落ちついた。

ノエルはもとより大らかで、細かなことは気にならない性格だったが、さすがにこの針のむしろのような状況はこたえていた。口には出さずとも、皆が自分を役立たずと思っているのが伝わってくる。それに城門守備の兵たちを死傷させたことに対して、彼女自身が深い罪悪感をいだいていた。自分にもつと魔力があつたなら、皆を守れただろうに。

ノエルがせめてもと、負傷者の世話や城壁の修理などを手伝いたいと申し出ても、それすら断られる始末だった。ディアドラは行く先々で、人々に指示や助言を求められるというのに。

「……ノエル、顔色が悪いぞ？　もうわしの世話はよいから、部屋でやすみなさい」

父のもとをたずねると、逆にそんな風に心配されてしまった。ノエルの鬱屈は、一目で分かるほど表にでていたらしい。

そのときアングラス王の寝室には、薬湯をとどけにディアドラも来ていた。

「そうねノエル。たしかにあなた、疲れてるようだし。薬湯は私が作るしお世話は小姓たちができるから、あなたは戻ったほうがいいわよ？」

暗に役立たずだから帰れと言われ、ノエルはしょんぼりしつつ父の頬に軽くキスして立ち去ろうとしたが。

「ノエル、わしには分かつておる。大丈夫だ、いつか皆も、おまえの良さが分かる日がくるから」

そう父にささやかれ、ノエルはじわりと涙がにじみそうになった。父の寝室を出ようとしかけたところで、ノエルは走りこんできた小姓と衝突しそうになった。

「も、申し訳ございません、ノエルさま！　……で、でもあの、これは緊急の知らせで……あの、ベリックさまより急使が参りました

！

あわてふためく小姓に、寢床のアンガス王が声をかける。

「よい。使者をこの部屋へ連れてまいれ。わしが直接、話を聞こう」
ノエルもディアドラも、その場にいた他の小姓や侍女たちも、皆が一様に緊張した。戦場にいる、王弟ベリックよりの急使。それはもしかしたら、悪い知らせかもしれない。たとえば本島がヴァイキングに占領された、というような。

重要な用件は文書ではなく、信頼できる者による言伝となる。

アンガス王の寝室は人払いがなされた。

まもなく招き入れられた急使の騎士は、埃まみれの旅装姿だった。乱れた格好で御前へまかり出たことの許しを請うてから、使者は用件を口にした。

「ベリック様より、言伝です。『ローランドとの同盟が成り、ヴァイキング軍を追い払うことに成功した。ついでにローランド王ウイリアム殿ともども、同盟の正式な誓約書を交わし、また両国の婚儀をととのえるためにそちらへ向かう』とのことですよ」

皆は一様に、驚きの声をあげた。

あれほどに難航していたローランドとの同盟締結。この件については王弟ベリックに一任されていた。それが成ったのは、激しいヴァイキングの猛攻に耐えかねて、土壇場で互いに歩み寄った結果なのだろう。

「なるほど。ベリックは巧みに取引したらしいな。……ノエルかディアドラ、どちらかを嫁がせることを切り札に、同盟を締結させたか」

アンガス王が二人の少女を見やりつつ、重苦しげにつぶやいた。
ゲール島を二分するハイランドとローランド。長らく争ってきた二国ゆえに、これからもヴァイキングへの共同戦線をはるには、政略結婚により関係を強化するよりほかはない。これまで互いに、憎しみとわだかまりばかりを抱きあう関係だったが、それもここで終結させねばならないだろう。

「ローランド王は、こちらへ見さだめに来るということですね？ 私とノエルと、どちらを妻にするかを決めるために？」

確認するようにディアドラが尋ねると、使者である騎士はやや気まずげにうなずいた。

ようするにローランド王は、ハイランドのもっとも高貴な少女二人を、品定めに来るということなのだ。

しばし、誰もが沈黙したが。どちらが花嫁に選ばれるか、皆はもう分かっていた。

ローランドには強力な魔女も魔術師もない。ならば選ばれるのはきっと、「偉大なる魔女の再来」とうたわれるディアドラだ。そもそも美貌でも知性でも優雅さでも、ノエルは何一つディアドラに勝っていないのだから。

使者はやがて、思いきったようにそれを口にした。

「……ローランド王ウィリアム殿は、すぐにでも花嫁を本国へ連れ帰りたい所存のようです。ヴァイキングの再度の侵攻があるやもしれぬので、ことを早急に済ませたいと。ゆえにこちらには事前に支度をしておいてほしいと、ウィリアム殿じきじきに私めに仰せになりました」

わだかまりのある隣国の王との婚姻に、何ら心の準備をする間もないまま、嫁がねばならないとは。ノエルはディアドラの行く末を心配した。

そう、ノエルとてローランド王が自分を選ぶとは到底思えなかった。正直なところ、心の奥底ではそれにほつとする部分もあり、そんな自分をノエルは責めてもいたが。何より強い感情は、ディアドラの今後の運命への懸念である。長く憎みあってきた敵であるローランドの国王。彼がディアドラを大切に扱うという保証はない。

「急の使い、大儀だった。そなたはゆっくり休むとよい。ベリックたちへの迎えについては、家宰に命じて手配をさせよう」

アンガス王が使者をさがらせると、寝室内には重苦しい沈黙がおりた。

「私、部屋へ戻らせていただきますわ。少し考えたいことがありますので。……もしも私が花嫁に選ばれたなら、伯父さまの薬湯を作れるものがいなくなりそうですね。その際は魔術修道院長に、作り方を細かく指示しておかねば」

淡々と告げて、ディアドラが部屋を出て行った。その後姿を見ながら、ノエルは呆然としていた。ディアドラのさりげない言葉に、衝撃を受けたのだ。

ディアドラがローランド王に嫁げば、魔法結界も、父王の薬湯も、そして王国の安全も。全てが失われてしまうのだと、ノエルはそのとき初めて気づいたのである。

（悩んでも仕方ないし、思いきって魔術修道院長さまに相談してみよう。あの方なら、もしかしたら私の馬鹿を治す方法をご存知かもしれない）

ノエルは大真面目だった。とにかく国と民のために、自分がしっかりしなければならぬ。一人前以上の魔女にならなければいけないのだ。それも大至急。

ノエルは夕食後、城内の魔術修道院へと向かった。それは彼女の住まう主塔の西にあり、跳ね橋を渡った向こうにある二階建ての建物である。その修道院の上階が、院長と修道女らの部屋だった。

魔術修道院とは、神に仕えつつ魔術を習う修道女のための施設である。ノエルは幼い頃から、この王城付属の修道院で魔術を習っていた。

「……まあレディ・ノエルったら、あいかわらず面白いお方ね。お馬鹿を治す方法だなんて！ ほほ、あつたら私がとうに試しておりますわ。私ときたら、このごろ物忘れが激しくて、失敗ばかりなんですもの。それにあなたはお馬鹿ではありませんわ。少し理解が遅くて忘れっぽくて、機転が利かないだけのこと」

（そういうのをお馬鹿というんじゃない？）

とノエルは思ったが、目の前の無邪気な院長にそう反論する気にはなれない。

魔術修道院長は、純真な少女がそのまま歳を重ねただけといったふうの、白髪まじりの上品な老婦人だ。他の修道女らと同様、幼い頃に魔術の才能を見出され、修道院へ送りこまれた貴族の娘だったのだという。無邪気な性格ではあるが、魔術・薬草・毒物という魔女の必須知識については、王国一詳しかった。

「あなたが昔から一所懸命勉強してたのを知ってるわ。その努力はいつかきつと実るんだから、焦らなくていいのよ。あなたのお母さ

まだって、ちょっと覚えが悪かったりしたけれど、少しずつ上達してあも素晴らしい魔女になれたんだもの。そういえばあなたのお母さまと、よく冗談でこんなことを言ったものだわ。『魔女の石』があれば、すぐに偉大な魔女になれるのにね、なんて。あの頃はほんと、馬鹿なことばかり言ってて、でもとっても楽しかったわ……」

「『魔女の石』？ それはいったい何ですか？」

「あ、まだあなたには話してなかったわね。実をいうとこのことは王族と魔術修道院長しか知ってはならない秘密なの。でももうあなたも十六歳だし、教えてもいい頃合いかもね。……『魔女の石』はね、いにしえの偉大な魔女が用いたという、魔力を秘めた聖なる石なの。これさえあれば、魔力を増大できたと言われてるわ。代々の魔女王がそれを継承してただけど、レムロム帝国がここを侵略してきた際に、それを奪われるのを恐れて、妖精に頼んで隠してもらったの。その後この地はレムロム帝国の植民地になって、魔女王の継承も途絶えてしまつて。あぐく、『魔女の石』をとりかえす方法が分からなくなつてしまつたの」

「え、でも妖精たちに預けたのなら、返してもらえばいいんじゃない？ ……」

ノエル問いに、院長は苦笑いを浮かべた。

「それがね、妖精というのはすごく頑固な種族だから。『われらにこの宝物を預けたのは本物の聖なる魔女だった。だから再び本物の魔女が現れたときにだけ、これを返そう』と、こうだったそうなの。ほら、かつて最後の魔女王がレムロム皇帝を毒殺したでしょう？ あのとくに帝国の命令で当時の魔女は皆殺しにされてしまつて、本物の魔術の継承方法は分からなくなつてしまつたわ。いま私たちが用いているのは、ほんのささいなわざだから。だから妖精は私たちを、本物の魔女だとは認めてくれないの」

そのときノエルの脳裏に、先日あの光景がよみがえつた。

「ーあ！ わ、私、ある妖精とこの前知り合いました！ ジェイミーっていう名前のヤドリギ妖精で。彼が私の馬と同じ名前だから

覚えてたんです！ その妖精が、私のことを『本物の魔女だ』なんておかしなことを言ってる……っ」

衝動的に言いかけて、ノエルは恥ずかしくなり口ごもった。落ちこぼれの自分が「本物の魔女」と言われたなどと。あの妖精の勘違いに決まっているのに。

だが院長は、そのことになんかの関心をひかれたようだ。目を輝かせて、ノエルに尋ねる。

「『本物の魔女』？！ ねえレディ・ノエル、その妖精がたしかにそう言ったのね？」

「いえでも、あの妖精の勘違いです、きっと。私ごときが本物だなんて、おこがましいし。デイーのことを言ったなら、すぐ納得できるんですけど」

すると院長は、ノエルの手を握りしめて、興奮しきったようすで声を上ずらせた。

「いいえ！ 妖精は勘違いなんてしませんよ！ ああ、ついに、ついにこの地に本物の魔女がよみがえったんだわ……それがあなただったなんて……本当にすばらしいわ！」

いつになく感情のたかぶった院長のようすに、ノエルが呆然としていると。

「レディ・ノエル。妖精たちは近いうちに、必ずあなたにコンタクトをとりにくるでしょう。そうしてあなたを認めてくれたなら、『魔女の石』を返してくれるはず。彼らはそういうことには律儀な種族だから。それまで心して待ちましょう」

ノエルは驚きつつも、院長に尋ねた。

「あの……もし本当にそうなら。私が『魔女の石』を受けとれるのなら。こちらから返してもらいに行っただけじゃありませんか？ その石は魔女の力を増大させるんですよ？ だったら私、その『魔女の石』の力で、はやく一人前の魔女になりたいんです。もうすぐデイーがローランド王に嫁いでしまう。そうしたらこの国を守る魔女はいなくなってしまうわ。だからすぐにでも私がー！」

「レディ・ノエル。……そうだったのね、だからあなたはお馬鹿を治したいなんておっしゃってたのね。でもね、焦ってもしかたないの。妖精は誇り高いから、こちらから『返せ』なんて言えばつむじを曲げてしまうわ。向こうから来るまで、待つのが一番なのよ」

「でもそんなことを言っつて、もしまたアंकウが襲つてきて、デイがこの地にいなかったらどうするんですか……っ?!」

「そのときは私が頑張るわ。きっとなんとかなるわよ、私たちには神がついておられるのだから」

どこまでも楽天的な院長には、こちらの焦りは伝わらないらしい。あきらめたノエルが辞去しかけると。

「ねえ……レディ・ノエル。あなたのお母さまは、あなたを生んですぐ亡くなれたけれども、最後にこう私におっしゃったの。『ノエルは選ばれた子よ。いつかハイランドを救うわ』って。だから焦る必要はないわ。あなたのお母さまの予言は、いつでも正しかったのだから」

そう告げてきた院長は、確信にみちた表情を浮かべていた。

ノエルは夜の森に、ひとり足をふみ入れた。

夜鳥や虫の鳴き声、獣たちが草をかきわけると力サカサという音、そしてノエル自身が枝や落ち葉や土をふみしめる音。それらにいちいちドキドキしながら、ほの明るいカンテラを頼りに、森の奥へと進んでいく。

エイデンヴァランド城には正門と裏門以外にも、限られた者しか知らない地下通路が、ふもとの森へと伸びている。その通路をたどりノエルがここにいることに、今のところ気づいた者はいない。魔術修道院長にも内緒で、彼女は行動を起こしたのだった。

もちろん目的は、妖精の預かっているという「魔女の石」である。ここは妖精の住まう森。こうして夜におとなえば、彼らはノエルに接触してくるかもしれない。そうしたらあのジェイミーという妖精に仲立ちしてもらい、「魔女の石」を返してもらうのだ。

（……院長さまはああ言われたけど、私は待つなんてできない。すぐにも力が欲しいんだもの）

元来のんびりした性格のノエルが、こうも追いつめられるのは珍しい。だが彼女は目の前で、アंकウによって傷つけられていく城兵らを見てしまったのだ。あのときは、何もできない自分が齒がゆくてならなかった。

「魔女の石」さえあれば。強大な魔力で、皆を守る力が手に入るかもしれないのだ。

（またあの不思議な人が、助けしてくれるとは限らないものね……）
先の城門の戦いで、アंकウからノエルを救ってくれた謎の青年彼については、まだ何も分かっていない。あの救い主はそもそも、どこから来てどこへと去ったのだろうか？　ここしばらく、城内でそれとなく探したけれども、それらしい人物はどこにもいなかった。彼の衣の香りをまだ覚えている。不思議な花の香り。そして彼は

ノエルに、香りのみならず強烈な印象を残していた。その姿も名前も年齢も、なに一つ分からないままだというのに。でもあのノエルを抱いた腕の力強さは、たしかに現実存在する生身の人間のものだった。

「　　よお、魔女さん、こんばんは。どうしたい？　こんな夜中に」
野太い男の声が、いきなり頭上からふりかかった。予想していたとはいえ、ノエルは思わず悲鳴をあげ、カンテラをとり落としてしまった。

「　　どすん、と地響きをたてて、巨体がノエルの目の前におり立つ。
「なんだよ、そう驚かなくても。俺だよ、この前のジェイミーだよ！　あんときはごめんな、ちよつと驚いてさあ……だってあんた、普通じゃねえもん。びっくりしたんだよ、こっちも」

意味不明の言い訳をしながら、ジェイミーはカンテラを拾い上げてノエルに手渡してくれる。

筋骨隆々、見上げるような巨体のヤドリギ妖精が、ぎこちない笑みを浮かべてこちらを見下ろしている。カンテラの明かりに浮かぶ、いかつい顔に浮かんだ笑みはちよつと怖い。

だがノエルは努力して、その恐怖にうち勝とうとつとめた。

「こ、こんばんは、ジェイミー。私はノエル・フレイザーといいます、よろしくね。じ、実は今夜は――」

「ん、分かてるぜ。あんた、『魔女の石』をとりに来たんだろう？　イーレンがそう言つて、俺をここへ迎えによこしたんだ。さ、ついてきなよ」

「　　え？！　分かてた？　そ、それっていったい……イーレンというのは、どなたです？」

「ん、それはまあ、あとで。とにかくあんたを連れてくるよう、奴が命令しやがったんだよ、まったくよお。ちよつと強いからつて、威張りくさりやがつて」

ぶつくさ言つと、ジェイミーはしばためらってから、ノエルの手をとった。「やっぱあんたの力は、ぶつうじゃねえ」と奇妙なこ

とをつぶやきつつ、手近な木の幹にふれる。

「おい、門兵のジェイミーだ、開けてくれ！」

彼がそう怒鳴ったとたん、目の前の光景が一変した。

森の暗闇に突然、輝ける靄が出現したのだ。

きらきらと輝くその中へ足をふみ入ると、驚いたことに別世界が広がっていた。森の中ではない、山と湖に囲まれた広大な台地に建つ壮麗な宮殿が、こちらを見下ろしている。月星の明かりが、あたりを銀色に照らし出していた。

どうやらあの輝く靄は抜け道で、森から別世界へと来てしまったようだ。

「あ、あれが妖精の宮殿……？ 素晴らしいわ、まるで細密画で見た異国の城みたい！」

青緑色の屋根に白亜の壁、針のような塔やアーチ型の窓がちらなり、あちこちに華麗な彫刻がほどこされている。昼の光で見たなら、さぞや麗しいことだろう。ノエルは思わず感嘆の声をあげていた。

「そりゃ、あんたらのごつごつした不恰好な城とは、比べものにもならねえだろうな。俺たちは美意識が高いから、さ」

ジェイミーは得意げに言いながら、ノエルを城の正面の楼門へとみちびいた。重々しい音をたてて城門が開き、二人は中へと招き入れられた。

妖精の城。ここへ足をふみ入れた人間は、ほとんどいないに違いない。なぜならいかなる書物にも、ここの様子は書かれていなかったからだ。

埃と汚れ、生活感あふれる匂いでみちた人間の城とは異なり、妖精たちの宮殿は作り物めいて美しかった。もちろん汚れたところなど全くない。

城内にいるのは、緑の髪に緑の目に青白い肌、ほっそりとした優美な姿の妖精たちだ。皆、ふんわりした薄手の白い衣装をまとい、まるで聖堂の天使の絵のように清らかに見える。

中には銀色の薄い羽を背中に生やしている者もいたが、人間だと

十代以下に見える少年少女ばかり。どうやら大人になると、その羽が消えてしまうものらしい。

妖精らは華奢なものばかりという印象だが、ジェイミーのような筋骨たくましい者も幾人か見かけた。きっとこの城を守る戦士たちなのだろう。

ジェイミーは城主塔らしき建物へと、案内してくれた。

「ようこそ、レディ・ノエル。あなたが『偉大な魔女』の再来なのですね。……たしかにあなたからは、なみならぬ強い力を感じるわ。迎えてくれた妖精女王は、人間でいう十歳ほどの容姿をしており、金色の羽を生やしていた。ひどく可愛らしいが、きっとこれでもノエルよりずっと年上だったりするのだろう。」

ノエルは丁重に膝を折り、貴婦人としての挨拶をした。

女王は彼女の手をとり、上機嫌で言う。

「『魔女の石』を預かったのは祖母の代、千数百年前のことです。」

それをこの私が本物の魔女に引き継げるとは、光栄なことだわ」

「予告もなくお訪ねしてしまって、申し訳なく思ってます。でもあの、皆さまは、私がここへ来ることをご存じだったようですね？」

『魔女の石』が目的だということも？」

ノエルが問いかけると、女王はくすくす笑った。

「少し前からここには、ある高貴な客人がおられるのです。あなたの来訪とその目的を教えてくださいましたのは彼よ。『魔女の石』は、彼からあなたにお渡しすることになってるの……きっと上階で、いらししながら待つてるわ。さあ、ご案内します」

状況がつかめず呆然とするノエルの手をひき、女王はらせん階段へとみちびいた。

階下で待つよう女王に指示されたジェイミーは、やや不満げな表情でこちらを見送っている。当然、ノエルについていけると思っていたのだろう。

彼に軽く手をふってから、ノエルは女王につづき、階段をのぼりはじめた。

（さつきジェイミーは、「イーレン」という人が私を迎えにやらせたって言ってたわ。ということは、女王の言うお客人がそのイーレンさんなのね。どうして私のことを知ってるんだろう？ その人は「魔女の石」とどう関わりがあるの？）

疑問を山ほど抱え、わけもわからないまま上階へつくと、厚い絨毯と美しいタペストリー、それに金銀の調度品で飾られた広間に通された。ノエルの父王の城など、足元にも及ばないみごとさである。その広間へ足をふみ入れるやいなや、ノエルは覚えのある香りを嗅ぎとった。甘く神秘的な花の香り。頭より体が覚えていたその薫香は、あの城門で救われた際に、謎の青年がまとっていたものだ。「イーレン、お待ちどうさま。レディ・ノエルがいらしたわよ！」女王が声をかけると、暖炉のそばの椅子にかけていた人物が立ち上がった。暗色のマントをすっぽりとかぶった後姿。それを見て、ノエルの胸が驚きと喜びで高鳴った。

ノエルは深々と膝を折り頭を下げ、貴婦人としての礼をとった。心臓が飛び出しそうな勢いで、どくどくと脈打っている。

彼の近づいてくる気配がした。足音はせず、優雅な衣擦れの音だけがさらさらと聞こえてくる。

「先の城門での戦いの際は、名乗りもせずに失礼いたしました。私はシア・イーレンと申します」

ときどきしながら、ノエルは顔を上げて　そして声を失った。あの城門での戦いで、アंकウから救ってくれた彼は、青年ではなかった。

上背があり姿勢もよく、その漆黒の瞳は活き活きとして力強い輝きを放っていたけれども。

フードをおろした彼の容貌は、老人のそれだったのだ。

イーレンと名乗ったその老人は、見慣れぬ格好をしていた。裾の長くゆつたりとした、合わせ衿の衣装。その上質な黒のシルクは、異国めいたデザインの花葉紋様を銀色に浮かびあがらせている。結って頭頂で留めた白髪に、珍しい形の冠をかぶっていた。

東方渡りの陶磁器に、このような装いの人物が描かれていた気がする。と、ノエルは思い出していた。彼は東方人なのだろうか？

老いているとはいえ、また異国的な顔だちとはいえ、彼には気品と風格が備わっていた。かつてはエキゾチックな美貌の持ち主だっただろう……五十年ぐらい昔には。

驚きとともに、どこかで落胆している自分を感じとって、ノエルは混乱した。

「……あ、あの時は、助けただいてありがとうございました。あの、私をここへ招き入れてくれたのはあなたなんですね？ どうして私がここへ来ると、お分かりだったんでしょうか？」

イーレンという老人は、どうやら愛想のかけらもない人物らしい。にこりともせずにノエルを見下ろして答えた。

「私は妖精たちに、あなたを見張らせていたのです。あなたが私の求める主かどうかを見極めるために。だからあなたがここへ来る目的も、すべて分かっています」

意味がよくのみこめず、ノエルは混乱した。

「見張らせてたってーあ、主って、いったいどういうことですか？」

「話せばだいぶ長くなりますが……つまりはこういうことです。世界に調和と安定をもたらすために、『天』は いや、あなたがたの言うところの『神』は、『偉大な魔女』をこの地上につかわした。私はそのお方を守る義務を負う者です。そしてその魔女とはあなただろうと、私はほぼ確信しているのです」

ノエルはなんと答えていいのか、分からなくなった。なんだかともんでもない話になっている。自分がそんないそうな存在のはずがない。落ちこぼれ魔女の自分が。

「あ　あの、せっかくですが、私はそんなすごい能力はないんです。どうして私があなたのお探しの魔女だと思われたんでしょうか？」

ノエルが尋ねると、イーレンと名のつた老人は、ぱちんと指を鳴らした。すると吊り燭台にとまっていたらしい小鳥がおりてきて、鳴き声をあげつつ彼の指にとまる。

それは、灰色の冴えない羽をもつ小鳥だった。その赤い小さな瞳で、じっとノエルを見つめる。やがてチィチィと鳴き声をあげて飛びあがり、ノエルの肩にとまった。

「かわいい！　いい子ね」

肩にちょこんとまり、見上げてくる小鳥に愛しさをおぼえたノエルは、思わずそうつぶやいていた。

「それはココという名で、神のつかわした魔女を見つけだす使い鳥。それがあなたのもとへ、私をみちびいたのです。ココがあなたをその魔女だと認めたのだから、間違いないはず」

と、イーレンに言われても、ノエルに信じられるはずもない。腑に落ちないという顔をした彼女を、イーレンは広間の隅へといざなった。

そこにはレースのクロスのかかった小テーブルがあり、宝石箱ほどの大きさの金の箱があった。箱は宝石で飾られたみことなものだったが、中にはひどく不恰好な石がおさめられている。荒れた木肌のようにごつごつとして黒ずんだ、楕円形の石だ。

「これがもしかして……『魔女の石』なんですか？」

想像と違っていたのに驚きつつ、ノエルが尋ねると。イーレンはうなずき、「それに触れてみてください」とやわらかな口調で命じた。

「あの……私などが触れても、大丈夫なんですか？」

「もちろん。それはあなたを待っていたものなのだから。『偉大な魔女』だけが、この石を本来の姿に戻すことができる。この石ならば、あなたが私の捜し求めていた主だという証を見せてくれるでしょう」

イーレンの確信めいた口調に首をかしげつつ、ノエルはそつと「魔女の石」にさわった。

しばらくそのごつごつとした表面をなでたが、何も起こらない。ノエルは失望と安堵を同時におぼえつつ、イーレンのほうを見た。

「あの……イーレンさま、やっぱり何も起こりません。私はあなたのおっしやるような魔女ではないと」

そのとき、奇跡が起きた。「魔女の石」がノエルの手の下で振動したのだ。ぶるりと震えたのを感じとり、驚愕した彼女が手を離そうとすると。

石がまばゆい光を放ちながら、かたかたと揺れはじめた。

「ー素晴らしいわ、今まで誰もこの石を目覚めさせることはできなかったのに！ 古代の偉大なる魔女たちにだって、できなかったことよ！」

背後から、興奮した妖精女王のはしゃぎ声が響く。

ノエルが恐れて手を放そうとすると、すかさずイーレンがとどめた。

石の振動と光とは、どんどん強まっていく。

そうするうちに、まもなくノエルのうちにも、変化が生じはじめた。石に触れた指先が熱い。自分の中に波のうねりのようなエネルギーが生まれ、奔流し、どこかへぶつかって波濤となって砕け散るような感覚をおぼえた。こんなのは初めてだ。

何かが変化しようとしている。かろうじてノエルに分かるのは、そんなことだけだった。

石の放つ光はますます強まり、広間中が白い光に包まれた。

同時にノエルの中のエネルギーも、行き場を失った波のごとく荒れ狂う。

「どうやら種が本当に目覚めたようだ。これが、あなたが『偉大な魔女』だというはつきりした証になるな」

「え、種ですって？　ねえイーレン、それっていったいどういうこと？！」

近づいてきた妖精女王が、イーレンの袖を引き、興奮したようすで尋ねる。

「これはもともと、石ではない。桃都樹という霊木の種で、育てられるのはとつもない力をもつ者だけだ……レディ・ノエルのような。この種はこれまでずっと石のような殻に守られて眠って、自分を育てられる『偉大な魔女』を待っていたんだろう。だからレディ・ノエルに会ったことで目覚めたんだ」

しばしの後、イーレンは異国の呪文を唱えつつ、ノエルの手を石から離れた。今度は急速に、石の振動と光とがおさまっていく。

やがてそれは黒色のごつごつした石から、アーモンド色のつややかな種へと変じていた。

ノエルは急に、足下がおぼつかなくなり、めまいをおぼえた。種の目覚めとともに、自分も何か変わったような気がする。

得体の知れない膨大な力が、おのれの内からわきあがってくる。

――怖い！

自分自身に恐怖を感じた瞬間、ノエルは気を失った。

昨夜のあれはすべて、夢だったのだ。

エイデンヴァランド城の主塔の上階、おのれの部屋のふかふかのベッドで目覚めたノエルは、起きぬけのぼんやりした頭でそう結論づけた。

夢だったからこそ、自力でこの城へ戻った記憶もないのに、こうして自分のベッドで朝を迎えたのだ。

妖精の森もジェイミーも妖精女王も、そしてあのイーレンという老人のこともすべては夢。だからノエルが「偉大な魔女」であり、「魔女の石」を霊木の種として目覚めさせたなんてことは、絶対にありえない。

（でも、すごく現実感のある夢だったかも……）

ノエルはあくびをしつつ、ベッドからおりた。

暖炉の前では、侍女たちが湯浴みの準備をしている。薔薇の香油とラベンダーの石けんの香りが、湯気とともにただよってきていた。ハイランドは貧しい国だが天然資源にだけは恵まれており、燃料の薪や泥炭はふんだんにある。よって王族は、毎日入浴するという贅沢を許されていた。

「ノエルさま、ほ、本日のお召し物はこちらでよろしゅうございませうか……？」

ドレスとベルトを手に、おずおずと尋ねてきたのは、いかにも不慣れそうな新入りの侍女だ。ベテランや気のきいた侍女らは皆、要領よくディアドラづきの侍女として鞍替えしてしまっている。よってノエルのもとに残っているのは、忠義者もしくは不器用な者ばかりだったのだ。

「ありがとう、あなたに任せるわ」

流行りのファッションにうといノエルは、素直にうなずいた。

彼女の衣装は、これまで城内でもっともセンスのいいベテラン侍

女が選んでいたが、今ではその侍女もディアドラづきの一人となっている。これは大きな痛手だった。なぜならハイランドにはあかぬけたドレスをこしらえる仕立職人がおらず、ノエルの衣装箱の中身は野暮ったい衣装ばかりなので、うまく組み合わせないと田舎くさくなってしまうのだ。

湯浴みを終えて着替えたノエルを見て、侍女たちはうめいた。どうやら、ひどく冴えなく見えるらしい。

本日のドレスは落ちつきすぎた紫色、さらに髪にはくすんだ茶色のリボンという組み合わせである。鏡で見て何かが変だとノエルですら思ったが、選んでくれた侍女を傷つけるわけにもいかず黙っていた。

「ノエルさま、せめてアクセサリーでもおつけになつては？」

年配の侍女が、ため息をつきつつ提案してくる。ノエルは皆の落胆したようすにとまどいつつもうなずき、差し出された宝石箱へ顔を向けた。

「えっ?! この箱って……? どうしてこれがここにっ?！」

それは黄金に宝石をちりばめた精緻なつくりのもの。昨夜の夢の中で見た、「魔女の石」が収められていたあの箱だった。ノエルのあまりの驚きように動揺した侍女が、しどろもどろに説明する。

「え、だ、だって、ノエルさまの衣装箱にあつたものだから、てっきり私……こ、これって宝石箱と違うんですか?!」

ノエルはとりあえずその箱を受けとり、中身を確認した。

「……嘘、みたい。夢じゃなかったなんて」

そのままへたりこみそうになるのを、ノエルはなんとかこらえた。金の宝石箱に収められていたもの。それは、昨夜の「夢」で見た「魔女の石」だったのだ。

（これが私の衣装箱にあつたことは、誰かがそこに入れたのよね。それに第一、あれが夢じゃなかったんだとしたら、私はどうやって宮殿からここに帰ってきたの?）

ノエルは侍女らをさがらせた。暖炉の前の小卓にその箱を置き、

そばの背もたれつき椅子に腰かけて考えこむ。

「魔女の石」、転じて「魔女の種」を手に入れるのは、もとのノエルの目的だった。だがいざその種を目の前にして、彼女は困り果てていたのである。

このことを魔術修道院長に相談しようかとも思ったが、困惑させるだけだろうと思いとどまった。

（『魔女の種』をどう使えば、私の魔力が増すのかしら？ 私ってほんと馬鹿よね。これを手に入れさえすれば、後はどうにかなると思ってたんだもの）

ノエルとしては、すぐにでも妖精の森へ行き、イーレンにいろいろと尋ねたいところだった。ところが。

「の、ノエルさま、陛下が至急、参上するようにこのことでございます！」

侍女があわてた声音で告げてくる。嫌な予感をおぼえて、ノエルは急ぎ父王のもとへ向かった。

「ノエル、わが優秀なる弟ベリックからまた使いが参ったぞ。ローランド王ウィリアム殿ともども、あと三日ほどでこの城へ来られることになったようだ。ヴァイキングの残党が、思ったより早く一掃できたらしいな」

かけつけるや父王にそう告げられて、ノエルはめまいがした。たった三日間。その間にローランド王を迎える準備を、全て完璧にとのえねばならないなんて。

「そうとなったら、まずは城内の大掃除ね。床のイグサは全部とりかえさせて、タペストリーもより優雅なものにかけかえさせましょう。それから宴会の支度も。冬に蓄えを使い切ってしまったから、今この城にはわずかな量の猪肉と鴨肉ぐらいしかないわ。香辛料だって、生姜と胡椒がほんのわずかにあるぐらい。ワインもビールもないし……ああ、急がなくては！ ノエル、あなたにも手伝ってもらわよ！」

アングラス王の言葉を聞くやいなや、やはりその場にいたディアド

ラが、まるでこの女主人であるかのように仕切りはじめた。

本来ならノエルこそがこの城をとりしきるべきなのだが、ディアドラが来てからというものの、その座はすっかり奪われてしまっている。

アングス王はかすかにため息をついたが、何も言わなかった。こういった支度を、ノエルよりもディアドラのほうが上手くやりおこなせるだろうことは、火を見るよりあきらかだ。ノエルの父王としても、文句をつけるわけにはいかないのだろう。

「それからノエル、ローランド王の前でそんなみっともない格好だけはよしてね。最近、なんだかやたらと田舎くさい格好ばかりしてるけど、今日のは特にひどいわ。なんなら私のドレスを貸してあげるから」

やっぱり今日の装いは、野暮ったかったらしい。たぶんドレスを貸してもらっても、ノエルとその侍女らではうまく着こなしができないような気がする。

ノエルが困惑するそばから、ディアドラがてきばきと指図を示してきた。

「まあ、ドレスのことは後回しでいいわ。それよりもまず、城の準備ね。ノエル、あなたは城内の床と壁、それからトイレ掃除の監督をしてもらっわ。私は料理の準備と室内飾りを監督するから！」

それからの三日間、ノエルは客人を迎える準備で大わらわだった。むろん、「魔女の種」のことで妖精の森へ行く機会はなく、それは彼女の衣装箱の中に大切にしまいこまれたままとなった。

ローランド王ウィリアムは、淡い金髪にアイスブルーの瞳をした、古代の美神めいた青年王だった。しかしその見た目とは裏腹に、気どりのない人懐こい人柄で、無骨なアングラス王すらもすぐにうちとけたほだった。

エイデンヴァランド城の、大広間。賓客を迎えての晚餐は、予想に反して楽しいものとなっていた。すべてはウィリアムの気さくで飾らない性質のおかげだ。

「今後しばらく、レディ・ノエルとレディ・ディアドラのようにお美しいご婦人がたと共に過ごせるのなら、むさ苦しい野郎ばかりの旅路をたえしのんだ甲斐もありますね。ノエルさまが陽光の女神、ディアドラさまは月光の女神といったところかな」

酒がまわり、主卓についた客も主人も、ほろ酔い気分で軽口をたたきあうようになった頃。ウィリアムにあっけらかんと誉め言葉を口にされ、無骨で無口な武人らに囲まれて育ったノエルは、思わず照れて赤くなった。

「お上手ですね、ウィリアムさま。でもそのような世辞でおだてなくとも、きちんとおもてなしするつもりですわ、私たち」

ディアドラが冗談交じりに返すと、まわりの者らがどつと湧いた。ノエルはというと、ウィリアムのほめ言葉への気のきいた返事も浮かばず、目の前の肉料理に夢中なふりをしてやりすごした。

「やれやれ。ローランド王は二人の花嫁候補どちらもお気に召したようだ。ですが嫁がせられるのは一人のみですぞ、お忘れなきように」

如才なく口をさしはさんだのは、王弟ベリックである。不器用で言葉を飾らない兄アングラス王とは違い、ベリックは弁舌巧みな男だった。嫡子であるアングラスにひきかえ、彼は先代王が気まぐれに手をつけた侍女の子である。その引け目ゆえに小賢しさが身についた

のだと、陰口をたたかれたりもした。

しかしそんなベリックも、今や病気の王にかわってヴァイキングを破った英雄とみなされている。その娘ディアドラともども、評判は高まるばかりだった。

「まあお父さま、そのような直接的な言い方をなさると、ウィリアムさまに呆れられてしまいますわよ。ウィリアムさま、お許しくださいましね。父ベリックはこうしてあなた様とともに都に凱旋できたことが、嬉しくてならないのです。それでいつになく舞い上がってしまったてるんだわ。さあ、お次はデザートですわ。私が腕をふるいましたの。お気に召していただけるといいんですけど」

ディアドラが麗しい笑みを浮かべつつ、給仕の運んできたイチジク・プディングを、ウィリアムの皿にとり分ける。カスタードクリームに赤い薔薇の花びらが彩りをそえたプディングに、ウィリアムは感嘆の吐息をもらした。

「僕は甘い菓子に目がないんです。たまらないなあ、これは。うん、香りも絶品」

ウィリアムがひと匙すくっては、ううんと唸る。

その隣席のアンガス王も、このプディングには目を細めつつ、さつそく匙をつけていた。病をおして晚餐の席についてはいたが、ここまでほとんど食べられずにいたというのに。それだけディアドラの菓子作りの腕前が素晴らしいということなのだろう。

ノエルは口の中でとろけるクリームにうっとりしつつ、ウィリアムに給仕するディアドラに賛嘆のまなざしを送った。

若きローランド王ウィリアムは、誰をも魅了するような笑顔で、ディアドラに軽口をたたいている。ディアドラのほうもまんざらではない様子。なかなか良い雰囲気だ。

（よかった……ウィリアムさまは妻をひどい目にあわせるようなお方じゃないみたいだもの。ディアドラが不幸になることはないわね。きつと、似合いの夫婦になるわ）

ディアドラとウィリアムをちらちらと見やりつつ、麗しい二人の

盛大な結婚式のようにすを予想して、ノエルはうつとりした。

これから正式に同盟締結の文書にサインを交わし、その後の数日間にはローランド王の歓迎行事が毎日なにかしら催されることとなる。そしてその間にウィリアムに、ノエルがディアドラを花嫁として選んでもらうという、暗黙の了解が成り立っていた。

とはいえ、ハイランド側の誰もが、花嫁はディアドラになるだろうということを、信じて疑いはしなかった。ウィリアムとの初対面の挨拶時にすら、ノエルの不器用さとディアドラの優雅さとは、好対照だったのだから。

この晩餐会での二人の装いもまた、あまりにも差が目立ってしまった。アメジスト色の瞳に合わせて薄紫のドレスをまとうディアドラは、女王のごとく気高く優美だ。対してノエルはというと、鮮やかな赤のドレスに深緑のリボンをごてごてと飾りつけた、品のない装いである。衣装もリボンもディアドラからの借り物だったが、センスのない組み合わせのせいで、それらの品は台無しになってしまっていた。

これでウィリアムがノエルを選ぶようなら、彼の美的センスが大いに疑われることだろう。彼がディアドラを選ぶことは、火を見るより明らかだ。

だがノエルの心は平和だった。もとよりディアドラと競っても仕方がない。

（二人がむつまじい夫婦になれば、両国の平和は保たれるわね。……あとは私が、一人前の魔女になればいいだけ。早くイーレンさまにお会いして、あの種の利用方法をお尋ねしよう）

あの夜、妖精の宮殿でイーレンたちと出会ってから、すでに七日が過ぎようとしているが、ノエルはなんら行動を起こせていない。ローランド王一行を迎える準備で、おそろしく忙しかったせいだ。

いつのまにか届けられていた「魔女の石」ならぬ「魔女の種」は、今も大切にノエルの衣装箱にしまわれているけれども。その利用方法が分からなければ、話にならない。もう一度妖精の宮殿へおもむ

き、イーレンたちに会わなければ。

（……それにしても、考えれば考えるほどおかしいわ。イーレンさまは、城門の戦いで初めてお会いしたときは、まるで若者のようなお声と体つきだったような気がするのに。どうして急に、ああも老けこんでしまわれたのかしら？ もしかしたら魔術で、若返ることができるお方なのかしら。まさかとは思うけど）

ささいなことではあるが、ノエルは気になって仕方がなかった。城門の戦いで助けてくれたあの人が老人だったとは、とても信じられないのだ。……いや、ただ信じたくないだけなのかもしれない。（でもそれって、イーレンさまが老人なのが嫌だってことよね。我ながらすごく失礼だわ。命の恩人に対して……）

「ーノエル！ 何ぼうつとしてるの？！ ウィリアムさまに失礼でしょう？」

ディアドラのいらだたしげな口調にふと顔を上げて、ノエルは周囲の痛いほどの視線を感じた。どうやらディアドラの向こうの席についたウィリアムが、ノエルに話しかけてきていたらしい。

ノエルは慌てた拍子に、持っていたスプーンの匙をテーブル下へ落としてしまった。王家の者らしからぬ不作法に、どうとりつくろうかと焦っていると。

「驚かせてすみません、レディ・ノエル。僕はあなたも魔術槍試合に参加されるのかと、お尋ねしたんですよ」

ウィリアムが人なつこい笑みをたたえて、問いかけてくる。匙を落とした不作法さなど、気にもとめてないようだ。

魔術槍試合。ウィリアムの言葉でそのことを思い出して、ノエルの表情は曇った。

それは、いにしえからこのハイランドに伝わる行事で、特別な祭りのときにだけ催されることになっている。たとえば王の戴冠式や結婚式、重要な賓客を迎えたときなど。

ウィリアムの歓迎行事として、明後日にそれは開かれることが決まっていた。むろん、ノエルも参加することになってはいたのだが

……。

この行事は、一見するとふつうの馬上槍試合とそう変わらない。武装して馬にまたがり、長い槍をかまえた騎士らが作法通りに激突するという。だが魔術槍試合の場合、騎士たちには組ごとに魔女がついており、魔術で援護することになっている。たとえば雷や炎の衝撃波で敵をひるませるなどして、おのれの組を勝利へ導くのだ。

よって騎士の力量よりも、魔女の能力のほうがより重要となってくる。ディアドラと組む騎士には、勝ちが約束されたようなものだ。明後日の試合で、ディアドラはハイランドでもっとも武芸のほまれの高い氏族と組むことが決まっていた。

ところがノエルはというと、魔力の弱い彼女と組みたがる騎士団が見つからずにいるところだった。明後日までに何とかしなければ、ノエルは出場辞退という形になってしまう。

「ええ、参加したいと思ってるんですけど、組む相手の騎士団が見つからなくて」

魔術槍試合へ出るのかと尋ねたウィリアムに対して、ノエルは正直に答えた。

ウィリアムの隣にかけるアングス王が、ふんと鼻を鳴らす。ノエルと組もうとしない騎士らのふがいなさに、いらだっているのだ。だがこればかりは王が、誰かに強制できるものでもない。魔術槍試合には、魔女だけでなく騎士の名誉もかかっている。そもそも負けると分かっている、ノエルと組むようなお人好しいはない。

ノエルの魔術の腕前がお粗末すぎて、誰も組みたがらないのだという事実を、ウィリアムはすぐに悟ったようだった。しばらく彼はじっとノエルを見つめていたが、やがて思わぬことを口にした。

「わが国には魔術槍試合のようなものはないんです。魔女がいないから。だから僕も参加させていただきたいんですが、……レディ・ノエルが組んでくれませんか？」

思わぬ申し出に、あたりの者らが驚きの声をあげた。

「なりません、ウィリアムさま！ ノエルの魔術は本当にお粗末で

す。きつと、試合でウィリアムさまに怪我をさせてしまっわ！」

ディアドラが悲鳴のような声をあげる。あんまりな言いようではあったが、だが事実だ。皆、口には出さずともディアドラと同じことを考えていた。

ノエルだつてそうだ。ウィリアムと組んで、もしも怪我でもさせようものなら……両国の同盟さえも潰えてしまうかもしれない。

「あの、ウィリアムさま、お申し出は嬉しいんですけど……」

「ウィリアムさま、ノエルには無理なんです。その証拠をお目にかけますわ。さあ、ノエル。あなたが落とした足元のスプーンを、魔術で拾つてごらんさい」

ノエルの不器用な断りの文句をさえぎるように、ディアドラが言う。ノエルは一瞬たじろいだだが、自分が先ほどテーブル下に落としたスプーンに目を落とし、やっとディアドラの意図を悟った。ノエルの魔術がいかにか拙いかを、実際にウィリアムに見せて思いとどまらせようというわけだ。

小物を動かすことは、ごくごく初級のわざだ。それでもノエルの技はたどたどしく、すぐに落としてしまう。皆の前で自分の拙さを披露するのは恥ずかしかったが、ウィリアムを説得するためにはやむをえない。ノエルはしぶしぶ、スプーンを動かそうと呪文を唱え始めた。

ハイランドの魔女たちは、いにしえの時代から呪文で魔術を行っていた。オガム語という古代の魔術語を用いて、物質に働きかけるのだ。スプーンにはオガム語での名前があり、それを用いて呼びかけねばならない。またその物質によって呪文の文法が異なってくるので、木のスプーンに対して正しく樹木の文法で呼びかけなければ動かせないのである。

ノエルがようやく、正しいオガム語でスプーンに呼びかけると。床のイグサの間でカタカタと動きはじめたスプーンは、いきなり宙に浮かび上がったかと思うと、すぐにまた落ちてしまった。失敗だ。やりなおそうとすると、それを制するようにすばやく、ディアドラ

が呪文を唱えた。すぐにスプーンは、かたわらで空の皿を片づけていた給仕の盆に、ひよいと乗る。

給仕が驚きの表情を浮かべるのを見ながら、皆はディアドラへの拍手を送った。アンガス王だけはノエルのために表情をくもらせ、拍手をしようとしめない。ノエルはというと、真っ赤になってうつむくしかなかった。父王に恥をかかせてしまったのが、心苦しかった。

「ご覧の通りですわ、ウィリアムさま。ノエルには魔術槍試合はまだまだ難しい段階ですの。もしよろしければ、私がウィリアムさまの魔女にならせていただきますわ」

ディアドラが申し出る。

だがウィリアムはじつとノエルを見て、答えた。

「……いえ、レディ・ディアドラのお申し出は嬉しいんですが。残念ながら僕は魔術槍試合は初心者です。きつと失敗ばかりして、ご迷惑をおかけしてしまうでしょう。その点、レディ・ノエルも今は修行中でおられるようだ。誰だって多くの失敗をしなければ成長できないわけだから、僕はレディ・ノエルと一緒に組んで、心おきなく互いに失敗したいんですよ。どうでしょう、レディ・ノエル？ 僕の特訓におつき合いただけませんか？」

ウィリアムは自分をかばって、そう言ってくれたのだ。ノエルはその気持ちが嬉しくはあったが、承諾するわけにはいかない。

「そんな……でも私のせいで、ウィリアムさまがお怪我をなさるかもしれないんですよ？ 大切なお客様に、そんな危険な真似はさせられません」

「試合で怪我をするのは、魔女ではなくその騎士自身の責任ですよ。下手な戦い方をするから怪我を負うんだ。大丈夫、危なくなったらすぐに降参しますから。僕としても、こんな美しい花嫁候補が二人もいるのに、結婚前に死ぬのはごめんですから」

ウィリアムの冗談に、皆が笑い声をもらす。

「……ノエルよ、ウィリアムどのがこうまで仰るのだから、断るの

は無礼というものだ。ご迷惑をおかけしない程度に、ともに戦ってみてはどうだ？」

アングス王がそう言ったことで、ことは決まった。

「それではレディ・ノエル、明後日の試合に備えて、明日少しだけ練習におつき合い下さい」

ウィリアムに言われ、ノエルは落ち着かない気分になりつつも、うなずいた。

隣のディアドラがとがめるような目つきでこちらを見ていたが、どうしようもなかった。

（どうしたらいいの……明日はどこかへ身を隠そうかしら……でもそれじゃウィリアムさまに失礼になるし）

ウィリアムに魔術槍試合で組むよう申し込まれた、翌日の晩。

ノエルは私室のベッドに座り、ひざに「魔女の種」を抱えたまま悩んでいた。

この日の昼間は、ハイランドとローランドが正式に同盟文書にサインを交わし、今後の方針をさだめる会議が行われた。ようやく夕方になんかが終わってから、日が沈むまでの間、ウィリアムとその騎士団とともに、魔術槍試合の練習をしたのだが。

ノエルの魔術はあまりに拙く、誤っていきなり小さな雷を発生させた結果、ウィリアムの馬が驚き、彼が落馬するという事態すら起こってしまったのだった。幸い彼はかすり傷で済んだけれども。

（このままじゃ、いざ試合になったら呪文すら忘れてしまいそう。そうしたら敵方の魔術への防御もできなくて、やっぱりウィリアムさまに怪我させてしまう。どうしたら穏便に、とりやめることができるのかしら？）

深いため息をつく。手の内の「魔女の種」をなでさすってみたが、何ら反応はない。

「ローレディ・ノエル。あなたは考えすぎだ。それでは本来の力は発揮できない」

突然、どこからか声が聞こえてきて、ノエルは飛び上がりそうになったが。

あの神秘的な花の香りをかぎとったノエルは、声の主が誰かを知った。いかなる香水よりも上品で優しく、うっとりするような魅力を含めた香り。

「驚かせて申し訳ない。あなたが助言を求めておいでのようなだったので、つい」

ノエルの私室は、海に面してちよつとしたテラスがついている。そちらから人影がひとつ、部屋の中へとしずかにすべりこんできた。「……イーレンさま！ ど、どうして？ どこからここへ？」

入ってきたのは、悪霊との戦いでノエルを救ってくれた人。妖精の森で再会した、あの老人だった。いったいどうやって、この堅牢なエイデンヴァランド城の中へ忍び込んだものだろう。

驚き立ち上がったノエルの前に、悠然と彼は近づいてきた。

「イーレンさま。私、あなたに会ってお尋ねしたかったんです。『魔女の種』のことか……！」

「あの晩、あなたが妖精の宮殿で気を失ったので、私はあなたをここまで送ってきました。その際に『魔女の種』も持ってきたのです。それからずっと、私はこの城にひそんでました。あなたをお守りする必要があったので」

「え、ええええっ？！ ずっと、ここにいらしたの？ 守るってどういうことですか？！」

驚き混乱するノエルを、イーレンは真剣なまなざしで見つめてきた。

「前にも言ったように、私は『偉大な魔女』たるあなたをお守りするため、ここにいます。そして……気づいておられないようですが、あなたには今、大いなる災いが近づいている」

彼に冗談を言っているような気配はない。ベッド脇のロウソクの明かりに浮かんだその表情は、真剣そのものだ。

「ど、どういうことですか？！ もしかしてまた、悪霊の船団が襲ってくるの？ それともヴァイキングが？」

焦ったノエルは矢継ぎ早に尋ねた。

イーレンはそれを片手で制すると、淡々と説明し始めた。

「いや、敵は城外ではない。この城には今、多くの者らの疑惑がうごめいていて、それらが複雑にからみあっている。その謎を解きほぐすまでは、あなたにお教えるのを控えます。レディ・ノエル、私はしばらくここへとどまって、陰ながらあなたをお守りします。」

だからあなたも、私のことは誰にも明かさずにおいてください」

「え……でも、どちらへ身をひそめるおつもりですか？ よければ私が、こっそりお父さまにお願いしてお部屋を」

「いや、目立つわけにはいけないので。さいわいここには、あなたのお父上が招いた道化師たちが大勢いる。実をいうと私は、彼らにまぎれてこの島へ到着したのです。その後は妖精の宮殿にひそんでましたが。とにかく、道化師には異国の者らも多いし、その中にいれば私が目立つ恐れはない」

そうまでして守らねばならないほど、自分は危うい状況にいるのだろうか。そう思うと、急に悪寒めいたものをノエルはおぼえた。もしかしてヴァイキングの手先が、この城の中にひそんでいるとか

……？

「イーレンさま、私、敵がどこにいるのかぐらいは知っておきたいんです。教えてください、敵は何者で、どこにひそんでいるの？」

「この城内にいます。ですがそれを知ってしまったら、あなたは普通にふるまえなくなつて、敵に悟られてしまうでしょう。そうなれば危険が増す。今は知らないほうがいい」

ノエルはぞつとした。城内にいて、彼女を害する恐れのある者。身内や使用人はそれに当たらない。となれば、ローランド王につき従ってきた誰か、もしくはウィリアム自身……？ まさか。ウィリアムはとても良い人だったし、そんなはずはない。

「あなたは余計なことを考えてはならない。私を信用してお任せください。必ずあなたにとって良い方向へと、状況を変えてみせる」

「ど、どうしてそこまでしてくださるんですか？ 私が『偉大な魔女』だから？ ……でも相変わらず私は魔術でスプーンすら持ち上げられません。私があなたの主だというのは、何かの間違いではないんですか？」

誰にも言えなかった苦しい思いを、ノエルは訴えていた。皆が魔女としてのノエルに過大な期待をよせ、そして失望していった。イーレンもいずれはそうなるだろう。こうまでして守ってくれている

彼までが。そう思うと、たえがたい気分に襲われたのだ。

「だから先ほど申し上げたんですよ。あなたは考えすぎてて、本領発揮できてない」と

嘆息しつつ、イーレンは言う。

「本領発揮といっても、私にはもともと能力がないから、発揮できるものなんてありません！」

半ばやけ気味にノエルが言うと、彼は思いがけない答えを返してきた。

「その通り。あなたはたとえ、これから百年懸命に努力したとしても、満足に魔術を使えるようにはならないでしょう。なぜならあなたは、空っぽになるよう生まれついているから」

空っぽ……というのは、頭の中身がということだろうか？ そう思われていたことにショックを受けて、ノエルは黙りこんだ。

イーレンはつづけた。

「そう落ちこむことはない。私が言いたいのは、あなたは小手先の魔術を駆使するよう生まれついてはいないということ。あなたは『偉大な魔女』、つまり『陰陽の魔女』だ。世界の陰陽を調和させるために生まれてきたのだから、魔術など覚えても邪魔になるだけ」

「『インヤンの魔女』？ インヤンって何でしょうか？」

エネルギー

「陰陽というのは、この世界に流れるふたつの気のことです。すべてのものは、この見えない陰陽に支配されている。いにしえから世界中の人々はそれを知っていて、陰陽の気を操る者を敬っていた。

……だが時代が下るにつれて、陰陽を操れる者が少なくなってきた。たとえばこの地でも、古代の魔女たちはふたつのエネルギーを敬い、調和させるすべを知っていた。それが滅んで、今は小手先の魔術を駆使する者が、魔女などと名乗っている。そして世界中が、このような状況になりつつあるのです。だから『天』は——あなたたちの言葉で言うところの『神』は、その陰陽を調和させるあなたという存在を、この世に生み出したんですよ」

ノエルは驚き、混乱した。イーレンの言うことがさっぱり分から

ない。ふたつのエネルギー、陰陽。そんなもののことは聞いたことがないし、古代の魔女がそれを操っていたことなど、書物にすら残っていない。

「……信じられないでいるようですね。だがこれは事実だ。だからあなたさえ私の言葉を信じてくれたなら、明日の魔術槍試合で勝つこともたやすい」

「ほ、本当ですか?!」

混乱しつつも、ノエルはその言葉に飛びついた。勝てなくてもいいのだ、せめてウィリアムに怪我をさせるような失敗さえ犯さなければ。

袖にしがみついて見上げるノエルに、イーレンは苦笑をもらった。「もちろん、私は嘘などつきません。いいですか、あなたには生まれつき、必要なものはすべて備わっているんです。ただ余計な知識を植えつけられたせいで、偉大な本質が芽生えるのをさまたげられてしまっている。明日の魔術槍試合では、魔術のことなど忘れてしまいなさい。ただ、陰陽の気を意識するんだ。世界にはふたつのエネルギーが流れていて、それをあなたは感知し操ることができる。その気になりさえすれば」

それだけを告げると、そっとノエルの手をほどいてから、イーレンは指を鳴らした。羽音がして、小鳥がテラスから飛びこんでくる。妖精の宮殿で見た、あの灰色の小鳥だった。

「これからはココが、あなたのそばについている。何かあったら、これを通じて私に連絡してください」

ココという名のその小鳥を、イーレンはノエルの肩先にとめた。そして身をひるがえし、テラスのほうへと去っていく。

「ま、待ってください！ そっちらは下には降りられません！」
あわてたノエルが追いかけると。すでにテラスに彼の姿はなく、黒い影が飛びすさり、向かいの塔の胸壁へと降り立つのが見えた。
（人間ではないと思っていただけ……あの方の正体はいったい何なの？）

彼の姿が夜闇に消えていくのを、呆然としながらノエルは見送った。

チイ、と耳元で鳴き声がしたことで、ノエルはココという小鳥の存在を思い出した。

「イーレンさまは、明日はただ陰陽を意識すればいいって言うんですけど。いったいどうすればいいの？ それにあの方は何者なの？

……あなたに口がきけたらいいのに」

ココの小さな体をそつとなでつつ、ノエルは呟いた。

翌朝は、呪わしいほどに快晴だった。天候が悪ければ魔術槍試合が中止になる可能性もあっただけに、ノエルはがっかりした。

試合場となる広場は、城下街の外にある。地面は平坦にならされ整地されており、石ひとつない。周囲には木の柵がめぐらされ、見物に来た民衆が、それに張りつくようにして試合開始を待っていた。まるで祭り日のように、焼きリンゴやミートパイ、エール酒の売り子が声をはりあげ売り歩いている。

広場内には続々と騎士団が集まり、それぞれのテントを設けて準備にとりかかっている。色とりどりの派手なテントの入口には、各氏族の紋章入りの旗が立てられていた。ハイランドの名家はほとんど、この晴れがましい行事に参加しているようだ。

王家の観覧席は、広場を見渡せるよう設けられた木組みの台上にある。そこではアンガス王と、この試合に参加しない貴族らが席について見守っていた。

ウィリアムのテントの前でその準備を見ていたノエルは、観覧席の父王を安心させようと、軽く手をふった。実際、ウィリアムの馬も武器も騎士団もすばらしく、ノエルの魔術がまっとうだったなら勝ちはずるぎなかったろう。

「レディ・ノエル。こちらはほぼ、万全の支度がととのったんですが、ひとつだけ足りないものがあるんです」

鉄の鎧をつけ終えたウィリアムが、テントの内から出てきて言う。ノエルは見当もつかず、目をぱちくりさせてウィリアムを見上げた。と、ウィリアムはノエルの手を慇懃にとり、その手袋のレースに触れた。

「これです。戦士は敬愛する貴婦人の贈り物を身につけてこそ、勝てるもの。この手袋をいただくわけにはまいりませんか？ 形式的なものですから、どんなものでもいいんですが」

ノエルは真っ赤になった。女性の持ち物を与えるのは、ハイランドでは恋人同士の間で行われるもの。だが今のウィリアムの口調からすると、ローランドではそれほど親密な行為ではないらしい。ノエルはすぐに手袋をぬきとって、ウィリアムに与えた。

「ウィリアムさま。よろしければ、わたくしの手袋もお持ちになつてくださいますし！ わたくし、ウィリアムさまが勝たれるよう祈っておりますわ！」

「まあ、ずるい！ それでは私のお持ちになって、ウィリアムさまっ」

いつのまに集まつてきたのか、ハイランドの貴族の娘たちがウィリアムとノエルをとり囲んでいた。どうやら皆、黄金の髪に青い目の美神のごときウィリアムに夢中のような。少し前まで敵対する隣国の王として恐れていた相手だというのに、大した変わりようである。だが気さくでユーモアあふれるウィリアムの人柄が、警戒心をこつとも早くに解かせてしまったのだろう。

「レディの申し出を断るのは心苦しいのですが。馬上槍試合で戦うものは、たった一人の貴婦人に忠誠を尽くすものです。せつかくですが、今回はレディ・ノエルのものだけをいただきます」

ウィリアムのあざやかな断り文句に、皆の注目がノエルに集まった。貴族の娘らの、嫉妬と羨望の入りまざった視線はたえがたく、ノエルはその場を逃げだしたくなった。

そのとき、近くにいたディアドラがこちらを見ているのに気がついていた。見ている、というよりまるで、睨みつけているかのようだ。他でもない、ノエルのことを。まるで憎んでいるかのようだ。

もしかして、自分がウィリアムと親密にしているように、ディアドラには見えているのだろうか？ だとしたらすぐに、誤解されないようウィリアムとは距離をおかなければ。

「レディ・ノエル。何か、気になることでも？」

あらぬほうを見て立ちつくす彼女を奇妙に思っただけらしいウィリアムが、声をかけてくる。

「い、いえ、別に何も」

ノエルがウィリアムに返事をして気がそれたすきに、ディアドラはおのれの味方のテントへと消えていた。

（……試合では味方だから、ウィリアムさまと親しくさせていただけなのに。まあこの試合が終われば、ディの誤解も解けるわね）

それからまもなく、あたりに高らかなラッパの音が鳴り響いた。

魔術槍試合大会の、開幕の知らせだ。

出場する騎士団が、それぞれの紋章入りの旗をかかげた従者を先頭に、会場内を柵ぞいに一周する。美々しい甲冑に身をつつみ、飾りたてられた馬に乗った騎士たちに、観衆らは惜しみない歓声を送った。

披露目をする騎士団には、それぞれ魔女がいる。皆、城下の魔術修道院の修道女ばかりで、おのれの出身氏族の騎士団と組んでいた。例外は最強氏族を選んだディアドラと、そしてウィリアムに頼まれ断れなかったノエルのみ。

魔女は騎士団の最後尾に馬をつけて、皆の注目を浴びた。中でもひととき大きな歓呼の声で迎えられたのはディアドラだ。彼女が騎士団とともに貴賓席の前で止まり、頭を下げて礼をとると、民衆席からは拍手が起こった。ノエルのときにはそのようなことはなく、ディアドラの圧倒的な人気は誰の目にも明らかだった。

まもなく試合が始まった。トーナメント形式だが、ノエルとディアドラの騎士団が特別扱いされることはなく、一回戦目からの出場となる。

気をしずめようとウィリアムのテントでひとり、神への祈りに没頭していたノエルは、何かが肩にとまる気配を感じた。

「まあ、ココ！　どうして部屋にいなかったの？　危ないのよ、この場所は！」

ノエルの小言をもとめせず、ココはくちばしで羽づくろいに没頭している。

「しょうがない子ね。試合中は、私のマントの中に隠れてるのよ、分かった？」

チチツと返事らしきものをするココを見ながら、ノエルはイーレンの言葉を思い出していた。

（魔術のことなど忘れて、陰陽の気を意識する……世界に流れるふたつのエネルギーを感じし操る）

よく分からない。でもあの人が嘘をつくはずがない。城門でノエルを救ってくれた、命の恩人なのだから。ノエルは何度も心の中でイーレンの言葉を何度もくり返した。一回戦目にのぞむため馬に乗り、ウィリアムらとともに待機場へと向かって、それはつづいた。「陰陽の気、世界に流れるふたつのエネルギー……魔術は忘れる……」

「レディ・ノエル、大丈夫ですか？ 先ほどから何かつぶやいておられるようですが。そろそろ始まりますよ？」

ウィリアムにうながされ、ノエルは我に返った。

試合が始まろうとしている。会場へのゲートが開き、興奮する馬を御しながら騎士団らが、入場しようとしているところだった。

ノエルは騎士団のしんがりについて進んだ。ローランド王家の獅子の紋章旗がたなびき、そして騎士らの鋼の甲冑が誇らしく陽光をはじいている。観衆らのどよめきが、どうっと地をゆるがした。

魔術槍試合は、ハイランドならではの催しである。他の土地には魔女がいないからだ。だが魔術を用いるほかは、他国での馬上槍試合のやり方とほぼ同じだった。

まずその試合場は横長の長方形に作られている。中央を見下ろす高座にある観覧席に、王侯貴族が着席している。たいていは王が、観覧席からハンカチを落として試合開始の合図とすることになっていた。

開始とともに両翼の騎士団が走りはじめ、激突する。互いの武器は槍であり、それで相手を突きたおす。転ばずに馬上に残っていたられた方の勝ちであり、引き分けならもう一度激突するのだ。

魔術槍試合では、さらにこの激突時に、魔術での攻防が加わる。小さな雷や炎などの衝撃波で敵をひるませると同時に、魔術結界で味方の騎士を守るのだ。魔女は騎士団のしんがりにつくけれども、下手をすると戦闘にまきこまれて怪我することもある。なかなか危険な試合なのだ。

「こちら獅子の紋章をいただきますは、いにしえの獅子王のやんごとなき血筋を誇るローランドの名家出身のウィリアムどの……」
ウィリアムの紋章官が、とうとうと試合前の口上を述べたてる。

騎士はおのれの紋章のため誇りをかけて戦う。なので必ず試合前に

は、紋章官がその紋章と騎士の血筋とを、観衆らに説明するのだ。

両騎士団の名乗りは、まもなく終わった。

ノエルたちの一回戦目の敵は、武勇の誉れも高いマクリーン氏族だった。彼らにつく魔女は、ノエルより少し年長の魔術修道女であるリリアナだ。赤毛の美少女で気性が激しく、とろくさいノエルを常に見下しているようなところがあった。今も、はなからノエルの能力を問題にしていけないようで、試合中だというのに騎士の一人といちゃついている。

（リリアナはたしか音魔法が得意なのよね。それだと騎士たちの甲冑や武器が狙われるわ。かぶとや剣がわんわん鳴り出したら、ウィリアムさまたちは苦労されるでしょう。音魔法への防御はたしか、音を伝える空気を支配するしかないのよね。ええと、空気魔法の呪文はたしか……）

父王が観覧席の上から、開始のハンカチを落とそうとしている。ノエルはそれを見やりつつ、必死で記憶をたどっていた。リリアナたちが最初の敵だと知ったのは、くじ引きが行われた数十分前のこと。そのときから呪文を思いだそうとしているのだが、どうも完璧ではない気がする。

（どうしよう、間違えたらウィリアムさまたちに迷惑がかかるわ。落馬でもさせようものなら、外交問題にもなりかねないし）

焦っても呪文は出てこない。ノエルはおのれの鈍い頭脳を恨んだ。そのとき、チチツと聞きなれた鳴き声が、彼女のマントのフードから響いてきた。灰色の小鳥ーココが、隠れていたフードから出てきてノエルの肩にとまり、その金髪の房をひっばる。

「ココ、だめよ。今はそんな遊んでる場合じゃないの……！」

小声でさとすうち、ノエルは気がついた。ココは彼女に、イーレンの言葉を思い出させようとしているのかもしれない、と。

（イーレンさまは、魔術を忘れると言ってたわ。つい魔術のことばかり考えてしまったけど……ああでも、陰陽を意識するって、どうすればいいの？）

悩むうち、王の手の内のハンカチが落とされた。試合開始のラッパが鳴る。観衆らのどよめきが、どうつと地をゆるがす。

ウィリアムたちの馬が、一斉に走り出した。向こうの敵も、土煙をあげてせまってくる。一瞬遅れて、ノエルも馬を走らせた。敵の最高尾につく魔女リリアナが、音魔法をしかけてくる。ウィリアムたちの鉄の盾や鎧、そして剣がうなりをあげはじめ、皆が疾走する馬上でぎくりとしたのをノエルは見た。このままではウィリアムたち、体勢を崩してしまう！

その危惧は的中した。驚きで浮き足だったウィリアムの騎士団は、敵の槍にすくいとられて落馬しかけた。が、かろうじてふみとどまり、試合結果は引き分けとなった。すぐに再試合が行われる。

（空気魔法はどうしても無理のようだし……こうなったら、陰陽の魔術をやるしかないわ。陰陽。インヤン。ふたつのエネルギー……）
心の中で、イーレンの言葉を反すうする。

せっぱつまった状況で集中したせい、ノエルには雑念がなくなっていた。無心に、イーレンの言葉をくり返す。

と、「魔女の石」を種に変化させたときの、あの感覚が戻ってきた。

ノエルの中に波のさざめきが生まれる。よせては引きをくり返し、さらに大きな波となつて体中をめくりはじめる。より集中すると、その波は体の中心あたりから生まれているように思えた。そして波はふたつのエネルギーをまとい、体中を血液のように循環する。

陰陽。ふたつのエネルギー。ノエルの体から生まれたその陰陽の波が、外へと飛び出す。

ごうつ、と風のうなり声が出た。ココがあわてて、ノエルのフードへと逃げこむ気配がする。

開始の合図のハンカチが落ちて、両者の馬が疾走しはじめた。ふたたび、ウィリアムらの鉄の甲冑や剣が、わんわんと唸りをあげようとしていた、が。

ノエルの体から生まれ出た風が、それらの音を呑みこみ、敵方へ

と押し寄せていく。とたん、悲鳴をあげて馬上につつぶすリリアナの姿が見えた。

ぐわん！ と両者の槍と盾とが激突する音が轟いた。つづいて、どつと地面に重いものが倒れる音。勢いあまってしばし駆けた馬をようやく止めて、ノエルがふり返ると。地面に落ちていたのは、敵方の騎士団ばかりだった。ウィリアムの騎士団は無傷だ。勝利を手にした瞬間だった。

「レディ・ノエル、すべてはあなたのおかげです！ あなたは素晴らしい魔女だ！」

一回戦を勝ちぬいてテントへ戻ったウィリアムや他の騎士たちは、口々に感謝の言葉を伝えてきた。試合場で勝者があからさまに喜ぶのは、良識に反する。互いの健闘をたたえてこそ、騎士なので、勝利の喜びはテントへ戻ってからということになるのだ。

「いいえ、とんでもありません！ リリアナが 対戦相手の魔女が、魔術を失敗しただけのことですわ。私は防御や攻撃の魔術を用いてませんし。だから魔術なしの槍試合でここまで勝てたのは、純粹に皆さんのお力ですわ！ 私の力じゃありません」

ノエルは必死でそう言ったが、ウィリアムたちは彼女が謙遜しているだけと受けとったようだ。

さきほど、リリアナは急に魔術を使えなくなってしまったように見えた。その後はぐったりと疲れはてて眠ってしまい、何が起こったのか聞き出すこともできなかった。

（私、もしかしてイーレンさまのいう陰陽のエネルギーを、操ることができたのかしら……？ イーレンさまがここにいらっしゃれば、聞くこともできるのに）

ノエルは困惑しつつも、つづく試合に続投し、勝ちをおさめていった。そのどれもが、魔女たちが途中で魔術を失い、最後には気を失うというパターンで終わった。ノエルはその間、ひたすら陰陽エネルギーのことを意識していただけだ。

さすがにここまでくると、観衆らも何かが変だと気づきはじめたようだ。

ノエルは何も魔術を用いてないのに、敵方の魔女が急に魔術を使えなくなる。そして純粹に互いの槍試合の強弱のみで決着がつく。まるでノエルとウィリアムに遠慮して、敵方が遠慮しているように、

観衆らの目には映った。

そして決勝戦の相手は、予想通りディアドラたちとなった。試合場で、両者が所定の位置につき、試合開始の合図を待つ。

八百長でノエルとウィリアムが勝利してきたと思いこんだ観衆らは、自然、ディアドラたちを応援する。試合場にとどろく応援は、どれもがディアドラたちに向けられたものだった。

ノエルが恐る恐る貴賓席を見上げると、父王と魔術修道院長が、心配げな表情を浮かべている。観衆の敵意がノエルに向けられていることを、憂慮しているのだろう。

（あれは……あの人は……！）

そしてノエルは、観衆席に黒いフードを目深にかぶった、すらりとした人影を見いだした。顔こそ見えないけれども、あれはイーレンだ。間違いない。試合を観に来てくれたのだ。目をこらすとその隣に、あの巨体のヤドリギ妖精ジェイミーの姿も見える。

（イーレンさまに叱られないよう、しっかりやらなきゃ。もっと集中して、陰陽のエネルギーを操れるようにしてみよう。ここまで勝てたのが陰陽の力なのかどうかは分からないけど、それが作用していることは間違いないさそうだし）

ノエルは馬上で、体に生まれる波に集中した。これがきつと、陰陽エネルギーに関係するものなのだ。

そしてついに王のハンカチが落ちて、試合が始まった。

ディアドラは雷魔術を得意としている。彼女が呪文を唱えはじめ、その身のまわりにぱちぱちと火花のようなものが飛んだ。彼女の雷の威力は強大で、せんだつて城へ押しよせてきた悪霊たちを、一斉になぎはらったほどである。

（……でも、ディの能力を恐れていてもはじまらないわ。私は私。できることだけを考えよう。今は陰陽のエネルギーのことだけを）

ノエルは集中した。外界のほとんどのことを忘れ去るほどに。そうするうちに、周囲の陰陽の流れが感じとれるようになっていた。ディアドラはオガム語の呪文で、雷を呼び出しており、そのせい

で周囲の陰陽は乱れてしまっていた。ノエルはそれを、正すだけでいいのだ。それでディアドラの魔術を破ることができる。

またもノエルの体内から、あの不思議な波が生じた。陰陽二つのエネルギーが体中をめぐり、そして外へと飛び出す。

そのとき。

どうつ、と何かがぶつかるような衝撃音がとどろいた。

ノエルは我に返った。

いつのまにか槍試合の決着がつき、ノエルたちの騎士団は試合場の端までたどりついていて、ふり返ると、敵の騎士団のほとんどが落馬し、地面に転がってしまっている。さきほどの衝撃音は、彼らが地面にぶつかったときのものなのだ。

ディアドラはかろうじて馬上にあり、落ちた騎士団のそばで呆然としているようだった。

まぎれもなくノエルたちの勝利だった。

だが、あたりは不気味に静まりかえっている。

審判がウィリアム騎士団の優勝を高らかに宣言するや、観衆席からは非難めいた叫びがもれた。明らかに、この試合結果に不満なのだ。

八百長。そう観衆らは誤解したに違いない。ウィリアムとノエルのために、わざとディアドラたちは勝ちを譲ってやったのだらう、と。

両騎士団が試合場を退いてもなお、観衆らの不満げなざわめきはやまなかった。

アンガス王が、ウィリアムの騎士団に優勝者の杯を与える。栄誉の瞬間のはずだが、周囲からはまばらな拍手しか聞こえてこない。あたりには、声にならない怒りと鬱憤がうずまいている。

そんな中、勝利の喜びを感じることなく、ノエルはウィリアムらともども試合場を後にしたのだった。

ところが自室へ戻ってもなお、ノエルは心安まらなかった。

「ノエルさま、あ、あの宝石箱が、大変なことに……！」

自室へ足をふみ入れるなり、あわてふためいた侍女に泣きつかれてしまったのだ。

侍女が指さす先、ベッドのそばの小テーブルに乗った箱が、かたかたと振動していた。まるで中に小動物でも入っているかのような。それは「魔女の種」が入った箱だった。

驚愕したノエルが箱にとびついて、震える手で押さえつつ鍵を開けると。

「きゃっ！」

ほん、と耐えかねたように何かが、飛び出してきた。その衝撃で、ノエルは思わず尻餅をついてしまった。

チチツとさえずりつつ、ノエルの肩にとまっていたココがはばたき、その飛び出した何かのそばにとまる。

それは、よくよく見ると大きな植物の芽だった。魔女の種が発芽したもの、小さな宝石箱におさまらず、振動していたというわけだ。

（そ、そういえばイーレンさまは、これが何かの木の種だっておっしゃってたわ。でも水もあげてないのに、いきなり芽が出たって、どういうこと？）

かけよってきた侍女に助け起こされつつ、ノエルは発芽した種と嬉しげにさえずるココとを、じっと見つめた。

（イーレンさまは、しばらくこの城内に身を隠すと仰ってたわ。そういうえば、魔術槍試合でもちらっとお見かけしたし。彼を探し出して、このことを伝えないといけないわね。このままじゃ、何が起くるか分からないもの）

明日は夕方から仮面舞踏会が開かれる予定だが、それまでは昼の会食をのぞけばフリーとなる。その間にあの不思議な老人を探し出そうと、ノエルは決心していた。誰かにもに探してもらえば、話は早い。だがノエルはしばらく、妖精の宮殿へ行ったことやこの「魔女の種」のこと、そしてイーレンのことなどを秘密にしておこうと思った。よけいなことで父王やディアドラや魔術修道院長を、心

配させたくなかったからだ。

（それにイーレンさまは、私に災いが近づいてるとおっしゃってたわ。そのことも、もっとくわしく聞かなきゃ。場合によっては、お父さまやディにも相談しなきゃならないし）

問題山積だった。

あまりにも考えるべきことが多すぎたせいで、ノエルはもはや、魔術槍試合で理不尽な目にあったことなど、すっかり忘れてしまっていた。

「ねえ、ココ。イーレンさまは城内にはいないんじゃないの？ あんな目立つ人がそうそう人波にまぎれこめるとは思えないし。東方風の衣装の人なんて、ここには他にいないんだから」

肩にとまる小鳥に尋ねても、ふいとそっぽを向かれてしまう。

「もう、ちゃんと協力して！ 『魔女の種』をあのままにしておけないでしょう？！」

ノエルが少し声をあげると、ちょうどかたわらをよぎろうとしていたカップルが、不審げにこちらへを視線をよこす。奇妙な独り言だと思われたらしい。

（仮面があつてよかったわ。私が気狂いになったなんて思われて、変な噂を流されたくないもの）

顔の上半分を覆う、羽飾りのついたベルベットの仮面の位置をおしながら、ノエルはほっとしていた。

彼女は中庭に出ていた。華やかな装いの貴族らが行きかう中、邪魔にならないよう隅の木陰で一休みしていたのだった。

昨日の荒々しい魔術槍試合とはうってかわって、今宵このエイデンヴァランド城では仮面舞踏会が催されていた。

広い中庭ではかがり火が焚かれ、楽しい音楽が奏でられて、人々がダンスに興じている。大広間での古式ゆかしい宮廷舞踊とは異なり、野外ではややくだけた軽やかなダンスが行われていた。

朝から舞踏会の準備に追われていたノエルは、暇になるやイーレンを探しまわっていたのだが、いまだ見つけ出せずにいたのである。ココは役に立つつもりはないらしく、ノエルに何を言われようとどこ吹く風で、羽づくろいに夢中だ。

途方にくれたノエルが、中庭のダンスを見るともなく見ていると。「どうして踊らないんですか？ レディ・ノエル」

いきなり背後から声をかけられて、彼女はびくりと震えた。仮面

で顔の上半分を隠していても、分かる人には分かってしまうものだ。ふり返るとそこには、仮面を外した金髪の貴公子　ウィリアムが立っていた。いかにも王者らしい優雅な金繡のガウンにマントをまとっている。田舎者と馬鹿にされているハイランド人と違い、ローランド人はヨーロッパ大陸からの流行をとりいれるのが上手いと言われている。

それに対して、ノエルはいかにも田舎の王女といった装いである。おおげさな襟かざりや重たげな袖飾りなどのついた、古めかしいデザインドレス。しかも、金糸で薔薇の刺繍がほどこされているものの、暗めのえんじ色の布地でできており全体的に地味だった。

だがノエルが目の前のダンスに加われないのは、野暮つたいドレスのせいではない。イーレンを探しているというのもあるが、もうひとつやむをえない理由があった。

「ウィリアムさま……お恥ずかしい話ですけど、私、踊れないんです」

目をつぶって己の恥を告白したノエルは、顔がかつと熱くなるのを感じた。きつとウィリアムは、呆れた表情を浮かべているだろう。ダンスが踊れない王族など、この世に存在していいはずはないのだから。

「そういうことでしたか。でもあなたが言うのは、そもそもダンスがワンステップも踊れないんじゃないかと、たんに上手く踊れないということでしょう？」

ウィリアムの言う通りだった。ノエルは不器用で、すぐにパートナーの足をふんづけたり踊りの列を乱してしまったりするのが悩みだった。それさえなければ、ノエルとてダンスを皆と楽しめたかったのだ。

ウィリアムは少年めいた笑みを浮かべて、快活に言った。

「だったら、気に病むことはありませんよ。昨日の魔術槍試合で、僕たちの息がぴったり合うことは証明されたじゃないですか。ダンスだって、僕と一緒にならうまくいきます」

なかば無理やり手をひかれ、ノエルはダンスの列に加わった。中庭での陽気なダンスは庶民的なもので、動きは激しいもののステツプはそう難しくない。しかもほぼパートナーと共に動くので、ウィリアムのみちびきで、そう間違えずに済んだ。

ノエルはいつのまにか、声をあげて笑っていた。氣どった宮廷舞踊ではありえないことだった。

「レディ・ノエル、踊りが下手だなんて嘘でしょう？　どうしても、あなたは謙遜してばかりなんでしょうね。魔術だってとてもない才能をお持ちなのに」

ウィリアムに言われ、ノエルは困惑した。

昨日の魔術槍試合は、なぜ勝てたのかいまだに分からずにいるのだ。どういうわけか相手の魔女が、魔術を駆使できなくなるという事態に陥っただけのこと。この日ノエルは、暇を見つけては対戦相手だった魔術修道女らをつかまえ、あの時のことを尋ねていた。ある者は首をかしげて原因不明だといい、ある者は負けを蒸し返されて不機嫌になり、そっぽを向くだけ。解明の糸口をつかむことはできなかった。

これに答えられるのはやはり、あの不思議な老人、イーレンだけだろう。

だからウィリアムにほめられるのは、具合が悪い。そこでノエルは正直に打ち明けることにした。

「ウィリアムさま、実を言うと私にもわけが分からないんです。私は落ちこぼれ魔女で、あの試合でも魔術はこれっぽっちも使えてません。だからそういうふうに褒められても、困ってしまいます」

「魔術を使っただけ？　ではなぜ僕たちは勝てたんですか？　敵方の魔女は皆、急に魔術を使えなくなったように見えた。あれはあなたのことではないんですか？」

「そのことは　私にもよく、説明できません」

そうとしかノエルには言えなかった。

ウィリアムは不思議そうにノエルを見つめていたが、やがてこっ

くりとうなずいた。

「あなたは僕の予想とはずいぶん違っていたな。とても素直で正直なのに、どこか謎めいている。……でも、あなたといるととても楽しいし安心できます。今、僕が何を考えているか、お分かりですか？」

謎かけるように問われ、ノエルは困惑して首をふった。ウィリアムはしばらくこちらを凝視していたが、やがて表情を改めた。

「もうこのことはいいでしょう。それよりもまた、ダンスを踊りませんか？ 一曲踊ったら、ビールもますます美味しくなるでしょうし」

ウィリアムに誘われ、ノエルはうなずいた。

「ありがとうございます、ウィリアムさま。さっきの踊りは、とても楽しかったわ。子供のとき以来です。だって大人になると、淑女らしく優雅に踊らなきゃならないんだもの」

につこり笑みつつ伝えると、ウィリアムも嬉しげな表情を浮かべた。うちとけた空気が、二人の間に流れる。

「……そうね、でもあなたは一度だって、淑女らしく優雅に踊れたためしはなかったわよ、ノエル。ウィリアムさま、今度は私と踊っていただけませんか？」

「デイ、あなたも外に出てたのね！」

いつのまにかディアドラが、二人のかたわらに立っていた。

ノエルがウィリアムと二人きりで楽しんでいたことが気に入らないらしく、きついまなざしでこちらをにらんでくる。

「レディ・ディアドラ。もちろんですとも」

ウィリアムは丁重に、ディアドラの誘いに応じた。一瞬、すまなそうなまなざしをノエルに向けてくる。

ノエルは微笑み、ウィリアムとディアドラを気持ちよく送り出してやった。

ダンスは楽しかったが、このままだとイーレンを探しに行けなくなる、ひそかに危惧してもいたのだった。ディアドラの横やりは、

むしろよい機会だと思っただくらいである。

それにしても、とノエルは思う。

（ウィリアムさまの花嫁候補とはいっても、私はおまけみたいなものだし。本命はディアドラに決まってるんだから、あんなに怒らなくていいのに……）

ため息をひとつつき、ノエルがその場を去ろうとすると。

「まあ、ごらんになって！ ディアドラさまのお衣装は、ヨーラ大陸渡りの職人が仕立てたものに違いはないわ。あのボデイスのレース飾りの見事なこと！」

「そうねえ、洗練されたウィリアムさまのお姿と、とってもお似合いだわ！ 田舎っばい格好のパートナーじゃ、ウィリアムさまが可哀想なもの」

ノエルにあてつけるかのように、ディアドラのとりまきの貴婦人らが、聞こえよがしな会話を交わしはじめた。

「あのお二人なら、絵のように美しいご夫婦となるでしょうねえ。……本当に、ウィリアムさまは優しすぎるのが惜しいところですね。早くディアドラさまと踊りたかったでしょうに、他の方におつき合いなさったりして」

さすがのノエルもこれにはむっとして、何か言い返したくなかったが。

「ねえ、ご覧になって！ あの吟遊詩人、ディアドラさまを陰から見守ってるわよ！ あの噂、本当だったのかしら？」

「噂？ ……ああ、もしかして吟遊詩人がディアドラさまにかなわぬ恋をして、つきまとっているっていう、あれ？」

貴婦人らが中庭の隅にいる男を見つけだし、騒ぎたてはじめたので、ノエルは気になってしまった。

その噂の主の吟遊詩人は、ノエルも見ることがあった。

赤毛で頬に傷のある大男。彼は、ひとめ見れば忘れがたい容姿をしていた。たしか、悪霊の船団がこの城を襲う前に、城内で弾き語りをして民衆をなぐさめていたのを、ノエルも目にしている。

その男は深いまなざしで、踊るディアドラたちを見つめている。たしかに意味深な態度だった。

「ねえ、噂だとあの吟遊詩人、ディアドラさまのお部屋に出入りしてるらしいわよ。もしかしたら二人は秘密の恋人同士じゃないかって……」

「しっ！ 馬鹿ね、やめなさいよ」

貴婦人たちは、そばにノエルがいたのを思い出し、噂話を中断する。

ノエルはその言葉にぎよとなったが、単なる噂話のことだしと、聞かなかったふりをした。

（すごい噂が流れてるらしいけど……でもデマに決まってるわ。あのデイが、そんな軽率な真似をするはずないもの）

ノエルが見ている前で、吟遊詩人はその場を離れ、どこかへ行ってしまった。

中庭の中央では、ディアドラがウィリアムと今もなお、楽しげにダンスに興じている。

何か奇妙な感覚を覚えつつ、ノエルはその場を後にして、イーレンを探しはじめたのだった。

「よお爺さん、久しぶり。あんた、俺たちと一緒にの船に乗ってただろ？　しばらく姿を見なかったな」

外庭ですれ違いざまにそう声をかけられ、翼任はちらりと相手に目をやった。

頬傷のある、赤毛の大柄な吟遊詩人。そう、たしかに彼は、翼任がこの島へ来るときに、船で乗り合わせた相手だ。

「爺さん、とぼけるなよ。フードで顔を隠しても、あんただと分かるぜ。その独特な香りだな。いったいどの香水を使ってるんだ？」

リース。そう、この吟遊詩人はたしかそういう名前だ。ここ数日、彼はあの食わせ者のしもべとして、いやらしい陰謀に加担していたようだった。翼任にとっての、いまいましい敵の一人である。

この男に正体を悟られてはならない。翼任はわざと、気分を害したような声音で返した。

「失礼だが、人違いをしてるようだな、吟遊詩人どの。この私が老人に見える？」

ばさりとフードをおろして顔をさらすと、リースは一瞬、ぎょつとしたようだった。が、すぐに気をとりなおしたらしく、彼は詫びの言葉を口にした。

「たしかに人違いのようだ。悪かったな、爺さん扱いして。その香水も東方の衣装も、知人に似ていたから」

これは体臭消しの香水なんかじゃない、一緒にするな。と心の中で毒づきつつ、翼任はふたたびフードで顔を隠す。

歩き出してからしばらくは、吟遊詩人の視線が背中にはりついているのを感じた。どうやらこちらを怪しんでいるようだ。なかなかカンの鋭い男らしい。

(……あの男にも、注意する必要があるな。一筋縄ではいかない相

手だ)

この夜、翼任はこの城全体に、ひそやかな緊張を感じとっていた。そこで外城から中までを見回ってきたのだが、そこに「敵」のしもべである悪鬼　この国の言葉でいうとディアウルが、潜んでいるのを発見したのだった。「敵」はもしかしたら、今夜中にノエルたちを始末するつもりなのかもしれない。

今、ノエルのことは妖精たちにひそかに守らせているが。この状況では自分がついていなくてはならないと、翼任は急ぎ跳ね橋を渡り、主塔へと戻ってきた。

仮面舞踏会が催されている今宵は、一度城門に入ってしまったえばさほど見咎められずにあちこち出入りできるので、好都合だった。

翼任が主塔の建物へと戻り、ノエルの私室へ向かうと。廊下のすみで、乱れた気配を察知した。

「くそっ！　この生意気なディアウルがつ！　この俺様に敵うとも思ってたのか？！」

ヤドリギ妖精のジェイミーだった。異様な姿の黒っぽい生き物をおさえつけ、いきまいている。それはとがった耳に槍のような尻尾、そして山羊のような角の生えた奇妙な生き物　ディアウルだった。「ジェイミー、人に見られたらどうする！　今のおまえらは姿を隠せていないぞ」

はっと気づいたらしいジェイミーが、あわてて姿を消す。

ディアウルは彼にさんざんに打ちのめされ、脅えたようにうずくまり震えていた。「敵」の操る悪鬼とはいえ、その姿に哀れみをおぼえた翼任は、そっとディアウルの首筋に手をやり、気絶させた。「もうこれに乱暴するな。しばらくは目も覚まさないだろうから。それよりジェイミー、レディ・ノエルはどこへ？」

ジェイミーは一瞬ぽかんとし、やがてあわてたような表情を浮かべた。

「忘れてた……でもこのディアウルの野郎が襲ってくるまでは、あなたの言いつけどおりちゃんと見張ってたんだぜ。レディ・ノエル

はあんたを探してるみたいで、たぶん今もあっちこっちろちよろしてる。どうやら『魔女の種』が発芽したことで、あわててるらしい。なあ、そのことを早くあの子に説明してやったほうがよくないか？」

「『魔女の種』が発芽したのは、レディ・ノエル能力が目覚めたせいだ。このことを告げたら、ますます混乱させてしまう気がする。それに彼女の能力の開花の影響を受けたのは、『魔女の種』だけじゃない。城内の魔女らもそして「敵」も、使える魔術が限られてきてるはず。……そしてこの私も」

ばさりと翼任がフードをおろすと、ジェイミーはぎょつとした様子でのけぞった。

「な、なんだよ、若返っちゃって！ そっぴや声の調子が違うとは思ったんだ！ 急に若作りなんて、何考えてんだよあんた？」

「馬鹿、若作りじゃない。元の姿に戻っただけだ。レディ・ノエルの膨大な力の影響で、私の術も使用不可となった」

「え、じゃあ、あんた本当は若かったのか！ いったいいくつだい？」

「二十三」

さらりと答えると、ジェイミーはしばし絶句した後、不機嫌そうにうめいた。

「なんだよ、若造じゃねえか！ 今までよくも偉そうに命令してくれたなあ？！ 爺さんだと思って遠慮してやったのによっ！ ……って、それよりあんた、魔術が使えなくなっただけ？ どういうことだよ。俺はなんともねえぜ？」

「魔術じゃなく仙術なんだが まあ、それはいい。おまえたち妖精は、そもそも存在自体が魔法的だから、レディ・ノエルの力の影響を受けたりしないんだ。私は半分、人間の血が流れているからな。もろに影響を受けてしまった」

「どうするんだい、あんたが魔術を使えないんじゃない、いざというときレディ・ノエルを守れねえじゃねえか！」

「幸い今は、敵も魔術を使えなくなっている。……ただ、魔術以外の手でもくるかもしれない。だからおまえたちに、レディ・ノエルとその父親をきちんと守って欲しいんだ」

翼任の言葉に、ジェイミーは不可解といわんばかりの表情を浮かべた。

「ダンカン王まで守る必要あんのか？ レディ・ノエルのために、その父親まで守ってやるっての？ なんかあんた、とことんあの魔女っ子に尽くしてるなあ」

「……馬鹿なことを。レディ・ノエルの心が不安定になると、とてもないことが起きる。だからなるべく彼女の心が乱されないようにしてるだけだ」

「へえ、そう。ふうん、なるほどねえ」

にやにやしながらこちらを見ているジェイミーにいらだちつつも、翼任は相手にしないことにした。

「それよりも早く、レディ・ノエルを探しに行こう。『敵』が動き始めそうな気配がある」

「イーレン、馬鹿言うなよ。この仮面舞踏会の夜にかい？ まさかそんな……」

と、そこへ思いがけないモノが飛び込んできたせいで、ジェイミーの言葉は中断された。それは、さえない灰色の羽をもつ小鳥ノエルのそばにいたはずのココだった。

「レディ・ノエルに何かあったんだな？」

翼任が尋ねると、その指先にとまった小鳥は、得たりとばかりにうなずいた。

「ならばすぐに、彼女のところへ案内しろ！」

翼任がココとともに走り出すと、ジェイミーもあわてて追ってきた。

ココが導く先は、どうやら主塔のテラスのようだった。王族とその近侍にしか、立ち入りの許されない場所だ。

（大事な方がいいがー）

嫌な予感がする。いつになく翼任の心には、焦りが生じていた。

「こちらよ、ノエル。私、テラスに出ているの」

ディアドラの私室に呼ばれたノエルは、その声にしたがいテラスへ出た。

そこは海ぞいの岸壁を見下ろす場所であり、せんだつての悪霊らの襲撃により、胸壁のそこかしこが崩れてしまっている。補修する間もなく、ウィリアムたちを迎えねばならなかったからだ。

月明かりで辺りを見渡すことはできるものの、夜には危険な場所だ。ノエルは崩れた胸壁から吹きつける海風にぞつとしつつも、ディアドラに近づいた。

「デイ、もうすぐ晩餐会も始まるのに。呼び出したのはなぜ？」

「もちろん、晩餐会の前にことを済ませたかったからよ」

「え、なにを？」

するとディアドラは、いつもノエルの愚鈍さに呆れたときにもらす、あの皮肉な笑い声をあげた。

「あんたつて、本当に何も分かってないわね。……まあ、そういうところが利用しやすかったんだけど」

つぶやくディアドラの銀の髪や紫の瞳がきらきらと月光をはじいて、人ならぬ美しさをかもしだしている。だが妖しい笑みを浮かべたその表情は、なぜだかとてもまがまがしかった。

いつもと様子の違うディアドラに、ノエルは違和感をおぼえた。

「いったいどうしたの、デイ？ 利用つてどういうこと？」

「本当に鈍い子ね、うんざりだわ。……単刀直入に言うと、あんたにもう利用価値はないし、それどころか私の邪魔にさえなってる。だから消えて欲しいの」

ノエルはしばし、言葉を失った。ディアドラの言う意味が、さっぱり理解できない。冗談だろうと思うことにして、かすれた笑い声をもらす。だがディアドラは表情を崩そうとはしない。

「そんな……邪魔って、消えて欲しいって……何を言ってるの？」
しだいにうろたえていくノエルを見て、ディアドラは妖しく笑った。

「じゃあ、馬鹿でも分かるように教えてあげるわ。　ねえ、少し前に森での薬草摘みで、皇帝ダケっていう毒キノコのことを、あんに教えてあげたのを覚えてる？」

唐突な話の飛躍に驚きつつも、ノエルはこくりとうなずいた。それは一ヶ月以上前のこと。鮮やかな色彩の皇帝ダケを、毒キノコと知らずに手にとったノエルは、ディアドラにこっぴどく叱られたのだった。だが、なぜ今そんなことを持ち出すのだろうか？

きょんとしたノエルに、ディアドラはつづけて話した。

「あの皇帝ダケは猛毒で、口にするとすぐにのたうちまわって死んでしまう。かつてレムロム帝国に侵略されたこの地の魔女は、皇帝をこれで毒殺したわ。でもね、実は皇帝ダケよりもっと強烈な毒キノコがあるのよ。強烈で、しかもゆっくりじわじわと殺していく毒キノコ。かの魔女がそれを知っていたなら、皇帝暗殺で処刑されることもなかったでしょうね」

「デイ、何を言ってるの？　どうして今そんなことを……？」

「皇帝ダケよりも強力な毒素を持つキノコには、皇后ダケという名がつけられてるわ。皇帝ダケの根元に隠れるように、ひっそりと生えていることからなの。でもね、この名前はぴったりだと思うわ。だって女は弱いと見せかけて、実は男よりも強靱さを秘めている存在だもの。　ねえノエル、あんたのお父上はあんなに健康でいられたのに、どうしてここ一年でこうも弱ったのか、不思議に思わなかった？」

ぞわり、と背筋を悪寒が走り、ノエルはおのが身を両手で抱きしめた。ディアドラは何を言おうとしているのだろうか？　なぜだが、とても怖い。

無言のノエルに見下すような視線をやりつつ、ディアドラはつづけた。

「皇后ダケの毒素を精製して、毎日の食事や薬に少しずつ混ぜるの。そうすると確実にゆっくり体が弱まって、証拠を残さずに人を殺すことができる。半年前から、あんたの父親で試させてもらってるわ」はじめノエルは、その言葉が理解できなかった。というより、理解を頭が拒んでいた。信じたくなかったのだ。

「ど、どうしてそんな悪ふざけを言うの……？　お願い、もうからかうのはやめて！」

狼狽するノエルを気にもとめず、ディアドラは腰の小物入れから小さなガラス瓶をとり出した。

「これが、その皇后ダケの毒素よ。無色無臭で、料理や薬湯に入れてもばれやしない。はじめは一年前、ここへ私が来てすぐに、アンガス王のお酒にまけて飲ませたわ。それからもずつと、薬湯に混ぜて飲ませつづけてきた。そろそろ限界でしょうね、陛下の体力も」

目の前でそのガラスの小瓶をこれ見よがしに振られ、ノエルはしばらくだすような声音で尋ねた。

「……どうしてそんなことを……どうしてお父さまに毒を盛ったりしたの……？　ねえ、嘘よね、たちの悪い冗談でしょう？！　嘘だつて言つて！」

するとディアドラの表情が、突如消え去った。銀の髪がもつれて、その白い頬にからみつく。人ならぬものに変貌したかのような。ノエルはその変貌ぶりに脅え、後ずさった。

つづくディアドラの声は、奇妙なほどに静かだった。

「私はハイランドの女王になるの。そのためには、アンガス王もおまえも邪魔なだけ。とくにおまえはローランド王の歡心を買ったばかりか、その気色の悪い力で私の魔力を奪おうとしている。母親はなみの魔女じゃなかったし、おまえもいずれは目覚めるとは思ってたわ。でもそれがこんなに強力だったなんて……。とにかくノエル、おまえは邪魔なだけなのよ。消えてもらわなければ」

「わ、私はウィリアムさまの歡心を得たりしてないし、それにあなたの魔力を奪ったりしてないわ、デイ！　それにあなたが女王

になりたいなら、私は王位継承権を譲るつもりでいたわ　あなた
がお父さまに毒を盛ったりしなければ！」

するとディアドラは憎悪をみなぎらせた眼差しで、ノエルを見や
った。

「ノエル、相変わらず何も分かつちやいないのね。ウィリアムさま
は、さつき陛下におまえとの結婚を申し込んだのよ。中庭で私と踊
ったすぐ後に、ね。陛下のもとにいた侍女は私の味方で、すぐさま
知らせてくれたのよ。それに魔力だって　私はあの魔術槍試合以
降、まともな魔術を使えなくなってしまった！　こんなことありえ
ないわ！　一体、何をしたのよ？！　私だって魔女の血すじに生ま
れたのに、あんたよりわずかに親の地位が低いばかりに、あんたの
下位に甘んじなければならかった！　……それでどれだけ屈辱を味
わってきたことか。あんたには分からないでしょうね、ノエル。私
はもう絶対に、誰にも見下されない地位に、のぼりつめてやるつも
りよ！」

悪鬼めいた形相を浮かべたディアドラに、ノエルはぞっとした。
何も信じたくなかった。いとこの正体がこんなにも邪悪で、ノエル
の父王に毒を盛っていたなんて。

そんなノエルを見て、やや冷静さをとり戻したらしいディアドラ
は、小瓶をちらつかせるようにして言った。

「これをあと数滴を飲ませるだけで、陛下は死ぬわねーまあでも、
おまえがそこから飛び降りるなら、陛下の命は救ってやってもいい
わ。父親のために死ぬ勇氣はない？　ノエル」

あまりな申し出に、さすがのノエルも逆上した。

「ー嘘つき！　私がここで死んでも、あなたは必ずお父さまを殺
すわ、デイ！　邪魔者を許すはずがないもの！」

「ふふ、少しは知恵がついたようじゃない？　まるきり馬鹿じゃな
かった、ってわけねえ」

ノエルはこれまで感じたことのないような、怒りの発作に襲われ
た。ディアドラにつめより、その手からガラスの小瓶を奪いとろう

とする。二人は無我夢中のもみ合いとなった。

周囲の壁にぶつかりながら、互いに相手の髪やドレスをつかんで争う。だが長身のディアドラのほうが、しだいに優勢になってきた。やがてノエルは、あの崩れた胸壁のほうへと押しつけられた。

「おまえを始末するのに、わざわざ加勢を呼んでおいたんだけど。

……その必要はなかったみたいね」

暗闇からふらりと姿を現したディアウルが、ノエルのそばをかすめ飛ぶ。

「デイ、あなたは……っ！」

憤りと絶望にまみれながら、ノエルはディアドラをにらみ叫びかけたが。それ以上、言葉をつむぐことはかなわなかった。

さらに強く胸壁に押しつけられたノエルは、背後の石積みがぐらりと揺れるのを感じた。きっと、ディアドラがあらかじめ崩れるように細工していたに違いない。

「さよなら、ノエル」

次の瞬間、崩れた胸壁とともに、ノエルははるかなる海面へと墜落したのだった。

ノエルはおのれの悲鳴で目を覚ました。あたりは薄暗いが、どうやらここは、温かなベッドの中のようなうだ。心を落ちつかせるラベンダーの香りが、寝具から漂ってくる。

（ゆ、夢だったの……？　ディのこともお父さまのことも。悪い夢……？）

ほっとして枕に頭をうずめる。

そう、ここは自分の部屋に違いない。もうすぐ夜が明けたら、いつものように侍女がやってきて着替えをさせてくれて、そして朝食の席に着く。そこには客人のウィリアムをもてなすディアドラが、いつものように優雅で美しい微笑みを浮かべていてー。

「どうしたい王女さま？　もしかして、どっか痛むのか？」

大きな音をたてて扉が開き、野太い男の声が響いた。とたん、部屋の中がぱっと明るくなる。壁に備えつけられた燭台が、ひとりでに点灯したのだ。

ノエルは声をあげるのも忘れて、珍入者を見やった。緑の髪の毛、たくましい大男……ヤドリギ妖精のジェイミーだった。

（どういうこと?!　どうしてジェイミーがここに？）

うるたえながら辺りを見まわして初めて、そこが自室ではないと気がついた。

エキゾチックなアラベスク模様のテーブル。その上にはクリスタルのランプ。やわらかそうな藤色のクッションの置かれた長椅子。床はイグサではなく、ふかふかした異国渡りの絨毯がしきつめられている。

（もしかしてここは、妖精の宮殿……？）

ノエルはベッドを出て、ぽかんと室内を見まわし、最後に視線をジェイミーにそそいだ。

「なあ王女さま。あんたがああ悪女に海へ突き落とされたのを、イ

「レンが助けたんだよ。覚えてないかい？」

ジェイミーは言いづらそうに告げてきた。

「やっぱりあれは夢じゃなかったのね……」

ディアドラの罠にはめられて、殺されかけたこと。そして父王が毒殺されかかっていること。

「――私、こんなところにいられない！ お父さまがデイに毒殺されてしまうわ！ 王宮へ戻らないとっ！」

ノエルはあわてて、ジェイミーにつめよった。

「まあ、やっと目覚めたのね、レディ・ノエル……！ とつても心配したわ！」

いきなりノックもなしに扉が開き、妖精女王が入ってきた。女王は前回会った時とは違い、寝衣の上にローブという、くつろいだ姿である。そこで初めて自分も寝衣姿だったと気づき、ノエルはあわててベッドシートをはいでまとった。

そして女王の前でなんとか淑女らしく膝を折り、懇願の言葉をのべた。

「陛下、こんな姿で申し訳ございません。でも、でも今すぐに、私を王宮へと帰していただきたいのです！ 早く助けに行かなければ、私の父が……っ！」

「――残念だが、アングス王は崩御されたと、少し前に触れが出ている。病が悪化したということだが……」

女王につづいて入室してきた見知らぬ男が、そう告げた。異国風の面だちをした、若い男だ。イーレンのによく似た衣装をまとっている。だが彼が何者かより、その口にした言葉のほうが今のノエルには重要だった。

「お父さまが……亡くなられた？ まさか」

鈍器で頭を強打されたかのような衝撃を受けた。

誰かにそれを嘘だと言つてほしくて、周囲を見まわす。だが否定する者はいない。

「お気の毒だけれど、本当のことよ、レディ・ノエル。城内では、

あなたは誤って海へ落ちて亡くなったことになっている。お父上はそのことで衝撃を受けられて、すぐにお亡くなりになったそうなの。私の配下の者が、ひそかに王のご遺骸を確認したんだけど、たしかに息をひきとっておられたそうよ」

女王の言葉のひとつひとつが、心突き刺すように響く。

お父さまが亡くなった。

私が死んだと誤解して……きっと強いショックを受けて。もともと毒で弱っていた体が、心の痛みで崩壊したのだ。

ノエルは力なく床に座りこんだ。皆が助け起こそうとしてくれたが、近寄らないよう、手でふりはらう。

「お願い、一人にして。私を一人に。……一人で考えさせて！」

いつになく激しい口調で告げると、皆は素直に部屋を去っていく。一人残された室内で、ノエルはよろよろと立ち上がり、ベッドの支柱にもたれかかった。どうしても力が出ない。考える力も、泣く力も。どうしてよいか分からない。

ベッドに呆然と座り込みながら、ノエルはいつまでも、うつろなまなざしで空中をにらんでいた。

勝ち誇ったディアドラの笑い声が、どこからか聞こえた気がした。

「おい、まさかこのままにはしておかないんだろ、イーレン？　アングス王の遺骸ぐらいは、とり戻してやるんだよな？！」

手近なテーブルをどんと叩きながら、ジェイミーが怒鳴りつけてきた。

広々とした厨房では、料理係の妖精らがのおの作業をしていたが、その手が一斉に止まる。皆の呆れたような視線をものともせず、ジェイミーはさらに翼任にくっついてかかしてきた。

「あんた、料理なんかしてる場合じゃねえだろうがっ！　ええ？　大体あの王女さまを、これからどうするつもりなんだよっ！　このままじゃあの性悪女がハイランド女王になっちまうぜ？」

「26番の薬草を一つまみ、とってくれ」

翼任はあっさりジェイミーを無視し、かたわらの従者にそう命じた。

従者――醜い姿の悪鬼ダウルが、きれいに分類された薬草箱の中から、乾燥した草をとりだし翼任に手渡す。翼任はその薬草を乳鉢に入れ、他の粉末ともども摺りはじめた。

角とがった耳、裂けた口元、白目の部分のない紫の大きな目。ダウルの姿はあまりにも異質だったが、他の使用人とおそろいの帽子に制服をまとう様子は、どこことなく滑稽だった。

「イーレン、無視すんなよっ！　だいたい、なんでこんなのを従者にしたりするんだよ？！　この妖精国だって人材はいるってのに！」

敵方のしもべだった悪鬼ダウルを従者にしたことが、ジェイミーはどうにも気に入らないようだ。

「ダウルはもともと、荒れ地に住まう穏やかな種族だ。それをヴァイキングどもが邪な術で操っているだけで。それにダウルは、この地に住まうどの人間や妖精よりも、薬草に詳しい。おかげで私の薬湯のバリエーションも増えた」

淡々と翼任は語った。ジェイミーは侮りの目つきで、ダウルを見る。
やる。

「ふん、弱っちいから、ヴァイキングに利用されたりするんだろ
うが。俺はこんなやつ認めないね。従者にするなら、妖精のがよっ
ぽど優秀だろうに」

悪態をつくジェイミーに、翼任はさらりと告げた。

「そう嫌うな。こいつは今後、おまえともどもレディ・ノエルの騎
士になる予定なんだから」

「ーは？」

あぐりと大口をあけたジェイミーの間抜けな表情は、なかなか
の見物だった。

翼任はもう一度、はっきりと言ってやった。

「女王とも話し合ったんだが、レディ・ノエルには騎士団が必要だ。
何しろこれから、あの悪女と戦って国を取り戻すんだからな。……

新生のノエル騎士団の団長はおまえだよ、ヤドリギ妖精のジェイミ
ー。そしてそのダウルは、おまえ付きの騎士見習いだ」

あつけにとられて声もせず、口を魚のようにぱくぱくさせるジェ
イミーを横目に、翼任は薬草を摺り終えた。かたわらの炉にかかる
鉄鍋に、その薬草の粉末を入れてかきまぜる。

「おい、イーレン……それって冗談だよな？　なんでこの俺が、人
間の騎士になんか……俺はこの妖精国の女王を守るための戦士なん
だぜ？」

「女王も了承済みだ。もうすべては決まってるんだよ、ジェイミー」
薬湯をかきまぜながら、翼任は伝えたが。

ジェイミーはどうにも、納得がいかないらしい。

「なんだジェイミー、あれほどレディ・ノエルに同情してたのに、
彼女を守るのが嫌なのか？」

「そうじゃなくてよお……なんていうか、人間を妖精が守るっての
が違っつていうか。それにこのダウルも一緒じゃ、かつこがつかね
え」

薬湯をマグにうつし、翼任はジェイミーに告げた。

「この薬湯をレディ・ノエルのもとへ持っていくから、ついでに騎士団のことをお伝えしよう。おまえたちもついてくるように」

「なあイーレン、冗談だろお？　なんでこの俺が」

「泣き言を言うな。レディ・ノエルの体調が良いようなら、すぐにも騎士任命の儀式をとり行う。覚悟を決めるんだな」

熊のように不満げなうなり声をあげるジェイミーと、どこかにはかんだ様子のダウルを従えて、翼任は調理場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1402s/>

陰陽の魔女

2011年9月10日03時22分発行